

幼馴染み達と行くハイ スクールD×Dの世界

花びら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神々の戦争の終結の余波で死んでしまった主人公達は、そのお詫びにと異世界へ行くことになり、それぞれ二つずつ特典を貰い、新たに生を受けることになる。

しかし、そこは人外が跋扈している世界で、果たして主人公達は生き残れるのだろうか？

原作の過去からスタートです。

原作知識はガバガバです。

それでも構わないという方は、どうぞ！

目次

始まりは突然に	1
残酷にして始まりの希望	16
ズレた歯車が回り出す少し前	34
ズレた歯車は回る、どこかが欠けようと	
も	53
哀れな墮天使	70
とある英雄達と小さな少年と心優しいシ	
スターの一時	86
聖剣計画・前編	100

始まりは突然に

「あれ？ここはどこだ？」

俺は気が付くと真つ白な空間にいた。

テンプレですね。

分かりますとも。

ならば混乱なんか必要はない。

そうして、俺は目的の人物を探そうとするが、そこにいたのは……

「あ？お前慎二か？」

我が親友の瀬戸諒太。

小学校からの幼馴染みだ。

「そうだよ。お前がいるという事はもしかしくなくとも……」

「その通り！僕もいるぜ☆」

後ろからそんな声が聞こえ、後ろを振り返ると……

「やっぱりいたか。麗風」

そこにいたのは同じく幼馴染みの眞壁麗風。

女だが、男勝りでいつも異様にテンションが高いが、昔から一緒に馬鹿をやつてる僕っ娘だ。

意外なことに胸は平均だ。

「死んだのは俺だけじゃなかったか……」

そう、俺はここにいる心当たりがある。

それは三人揃って大学の帰り道にマクドの店でそれぞれ別のものを食べていたら、此方にトラックが突っ込んできたのである。

そこから意識はブラックアウトしているが、そこで死んだんだろうと思う。

俺が残念がつっていると、二人は目を合わせてから励ますかのように口を開く。

「なんだよなんだよ。俺達だけ生き残ってお前だけ異世界転生でもしたかったのか？
だが、残念だったな。俺も一緒だ！」

「僕たちはいつも一緒さー！これからの苦難を一緒に乗り越えようぜ！」

実際に励ましたのだらう。

彼らは一部始終ずっと笑顔だ。

フツツ、俺には勿体なくらいの立派な友人たちだ。

なら、ここでテンションを下げるわけにもいかないな。

「ははは！死んだつてのに、相変わらずだなあ。だからこそ、大好きだぜお前ら！」

「野郎が野郎に大好きって……………。なんだ？ホモに目覚めたか？」

「…………（赤面とモジモジしながら）不束者ですが…」

「嘘だろ!?!」

「() 歓談中、失礼します」

「(!!)」

俺と諒太が冗談言っていると、麗風が本気になつ多ので慌ててる最中にどこからか全く知らない、綺麗な声が聞こえた。

俺たちがそのその方向を見ると、あからさまに邪神を思わせるような黒い服に黒いオーラを纏い、顔に骸骨マスクを被った死神がいた。

その姿を見て、俺たちの心は一つになった。

「() 馬鹿な……………。死神…………。だと…!?!」

「本当に仲が良いですね。その前に、一つ謝罪を」

俺たちが巫山戯ていると、突然、目の前にいた死神は骸骨マスクを外した。

そこから露わになった顔は滅茶苦茶美人だった。

俺たち全員が見とれるほどの美人だった。

「我ら、神々による戦争の余波で貴方たちが死んだことに、謝罪を。申し訳ありませんでした」

そう言つて彼女は頭を下げた。

どういうわけか聞くと、この地球の土地件みたいなものを異星の神々が奪おうとして、地球の神々に戦争を仕掛けたそうだ。

最終的に地球の神々が勝つたのだが、その最後の最後に、異星の神々の一人が悪足掻きにと自爆をし、その威力が現世にまで響いたという。

それで、事後処理にその被害者を探したところ、それが俺たちだったらしい。

他にもいないのか聞いたところ、なるべく最小限になるように被害を抑えてたらし、その余波で、偶々俺たちの近くを通つたバスが衝撃を受け、俺たちの所に突っ込んできたらしい。

おのれ、異星の神々……。

お前らのせいで、俺が楽しみにして頂いていたラノベの新刊が買えなくなつたではないか！

「うわああ！俺の予約していた英雄フィギュアが今日届くはずだったのにいいい！」

「姫ちゃああああん！私の姫ちゃんがああああ！」

話を聞き終わった俺たちは別の意味で悔しがっていた。

だって、異星の神々のせいで俺らが楽しみにしていた物が見れなくなつたんだから。

俺はラノベ、諒太はフィギュア、麗風はアニメと、それぞれ別々だが、それが見れな

く、嘆いた。

自分に怒りが来ると思っていた死神さんは、その状況に涙目ながら困惑していた。その時、また一人増えた。

「その者達が、件の被害者か」

「スプンタさん……………」

新たな人物の登場に俺たちは早速立ち直り、その人物を見やる。

こちらは男性で、死神とは対極の位置にいそうなほど白く、全身に白いローブを纏っているために詳しい事は分からない。

その人物を見て、死神は「スプンタ」さんと言った。

スプンタ……………まさか

「スプンタ・マンユ……………?」

「ん?俺のことを知ってるのか?俺は結構マイナーな存在だと思っていたんだが」
スプンタ・マンユ、またはアフラ・マズダーと呼ばれている。

ゾロアスターに於いて崇拜される最高神にして創造神。

世界の二大原理と言われる内の一つ「善」を選び、アンラ・マンユと対を為す善の神々の筆頭。

神話に詳しい奴なら誰だって知ってるほど有名な存在だ。

「マイナーどころじゃない。ゾロアスター教に於いて、世界でも有数の信仰を集める神様じゃないか……」

「信徒にしか知られてないと思っていたが……まだまだ現世も捨てたものじゃないな」

俺の反応にどこか満足したのか、顔全体は見えないが口元でしたり顔をしているのが分かる。

しかし、何故そんな大物がここへ……？

……あれ？

まさか、隣にいる死神ってまさか……!?

「お前らなら用件は分かっているとは思いますが、俺がここに来たのはこのアンラ・マンユと一緒に前らを『転生』させる手伝いだ」

やっぱりか！

アンラ・マンユ、スプンタ・マンユと対を為す二大原理の「悪」を選んだ邪神。ゾロアスター教ではもう一人の創造神とも言われている。

しかし、伝承通りならこの二柱の勢力はお互いに争っているはずだが………？

「その……えー、憤二つったか？お前なら俺らの事情を知っているとと思うが、俺らは本来ならお互いに争っている仲だ。しかし、今回は暢気に戦争してる場合じゃないから

今はまだ停戦協定を結んでいるのだ」

「(よく分かっていない諒太と麗風) ???」

「その二人は後で慎二の奴から教えて貰え。それで、事態は収束したは良いが、お前達をどうしようかと他の神々と話し合った結果」

「我々二人で、貴方たちを転生させることにしました。しかし、この世界は無理なので、そちらでパラレルワールドと呼ばれる世界に転生させようということになったのです」

「それと、容姿は気にするな。偏差値は高いようにしてやるから。そして、それとは別に特典も付けてやろう。これは他の神々の力も分けて貰ってやると二つずつで三人分だ。特典はあちらに行つてから確認できる。決まったら言つてくれや」

「ここまで来て、俺が思ったこと言つて良い？」

「この二人逆じゃね？」

「邪神なのに敬語を使って美人なのに、善神なのに言葉遣いが雑とはどういうことですかね？」

「いや、これは深く考えたら読者が面倒くさがるやつだ(メタい)。」

「今の説明を受けた俺たちは早速相談する事にした。」

「なあ、まずアンラ・マンユとスプーン・マンユでなんだ」

「アンラ・マンユは良いとしてスプリンタ・マンユな。あの二人は——（簡易説明中）——」

「へえ、凄いなだね」

「ああ、本来ならもつと説明したいが、あの二人をあまり待たせる訳にはいかないから早速本題だ」

「確かにそうだな。んー、俺としちゃあ、高速演算処理可能な脳が欲しい。だからとそれに類いする神器辺りか」

「神器って……アリのなの？」

「特典ならアリなんじゃないか？ダメならまた考え直そう」

「なら僕は土系操作能力と鎖系の神器が良い！」

「なんで鎖なんだ？」

「え？かつこよくない？」

「……OK分かった。ならお前らと被らないとなると、そうだな、回復系か暗殺系……暗殺の才能と回復系の神器にしようかな」

「これで全員決まったかな？」

「よし、なら行くか」

相談が終わったので、俺たちは二人の元へ歩いた。

それに気付いたスプンタ・マンユがこちらへ話し掛けてくる。

「お？もう決まったのか？」

「「はい！」」

「よし、じゃあ言いな。お前らの特典を神様らしく叶えてやる」

そして、俺たちの願いを言うと、なぜかスプンタ・マンユはニカツと笑い、同様にア
ンラ・マンユも微笑む。

「なんか、やらかした…？」

そんな俺の心中を知ってか知らずか、スプンタ・マンユはそのまま、口を開く。

「それで文句は無いな？お前らの能力に合わせて、これから行く世界をランダムで選
んだから、その世界について話そうと話すぜ」

その言葉に真面目に聞く体勢を取る俺たち。

「これから貴方たちが行く世界は各神話の神々や聖書に出て来る悪魔や天使、墮天使
が跋扈しています。聖書以外の神話体系に問題ないのですが……」

「その聖書の神話体系が一番問題でな。悪魔、天使、墮天使の三大勢力が互いに仲が悪
くてよ。互いに互いを消そうといつも争ってるからな……」

「その世界やばくないか!？」

「というか墮天使と悪魔って同じ陣営じゃないの!？」

いや待って、他神話って全神話体系が現存してるということか……？

俺たちは生き残れるだろうか……？

「しかも、悪魔に関してはヤバいぞ。あいつらは悪魔の駒イーヴィル・ピースつつー、チェスの駒に見立てたアイテムを持っててな。他種族を強制的に悪魔にさせるんだ。しかもあいつらは言葉巧みに勧誘して、自分の下僕にするんだ」

「中には下僕にしたからと、強制的に悪魔にさせられたやつを好き勝手する奴がいることです。救いなのは、そう言った悪魔達が昔に起こった大戦で半数以上が無くなったことですね」

昔起こった大戦……？

「そう言えば言葉が足りませんでしたね。その大戦と言うのは、二天龍と呼ばれるほどの勢力にも属さない神にも匹敵する力を持った二色の龍なんです。三大勢力が互いに起こした大戦争の最中に周りを気にせず喧嘩を始めて三大勢力に無視できぬほどの被害を与えたのです」

「最終的には、天使側のボスである聖書の神・ヤハウエが命と引き換えにそれぞれ武器に封印することに成功したんだ。しかし、それらは封印されたにも強大な力を持っている。一つは籠手に、一つは機械的な翼に。それはその状態でも神を殺せる力を持っていることから、一つの武器ランクに加えられた」

「その名は神滅具^{ロンギヌス}。そのワンランク下に神器があるので、神滅具神器の上位互換みたいなものです。実はこの名前の由来は別にありまして、黄昏の聖槍^{トウル・ロンギヌス}と呼ばれる、かのイエス・キリストを殺したと言われている槍です」

普通にかっこいいな。

あ、今厨二臭いとか言ったやつ、君たちには分からないのか!?

あのかっこよさが!

「ちなみにそれを作ったの誰だと思う? なんと、聖書の神なんだぜ? 自分で自分を殺せる武器を作ったんだぜ? アホみたいだろ?」

まじかよ……………。

「ま、そもそも神器以上の物は、人間にしか宿らないという性質を持つてるからな。他種族に自然に宿ることは無い。しかし、その人間から抽出して自分の物にすることは可能だ。だから、殆どの勢力は目覚めていない神器使いを良くて保護、最悪殺して自分の物にするという行動を起こす」

「とは言っても殺すという手段は雑魚しか取りません。恐らく目覚めたばかりでも貴方たちなら下級悪魔にでも勝てますから安心して下さい。しかし、これだけは謝らせて下さい」

「お前らは纏めて転生することはできるが、その場所は特定できないんだ。スラムか

富裕層か一般宅かランダムで決まるんだ。こればかりは本当にすまない」

二人はそう言つて頭を下げた。

つて、ちよい！

「そんな、頭を下げないでください！」

「そうです！これから転生させられる身です！そこまで求めては罰が当たるといふ物です！」

「僕たちがバラバラに転生できるだけでもありがたいのです！だから、顔を上げてください！」

「優しいんだな……。君たちは」

「そうですね……。何故彼らのような子供たちを守れなかったのでしょうか……」

俺たちが慌てて顔を上げさせようとすると、二柱の神は顔を上げて俺たちには聞こえない声で互いに何かを話していた。

一体何だつたんだろうか？

疑問に俺たちを置いて、彼らは一言謝つてから説明を開始する。

「会話を止めてしまつてごめんなさい。それで、さっきのつづきになるんですけど、貴方たちなら下級の人外なら問題はありませぬ。ですが、中級以上になると苦しくなつてきます」

「だから忠告だ。神器は思いの力でその本人の強さを大幅に変える。一番簡単なのは復讐心だが、それは逆に一番の問題でもある。復讐心は自己犠牲を考えることをやめしてしまう。その点で言えばまだ戦闘狂のほうがまだ良い。あいつらは勝とうが負けようが満足できりやそれでいいし、弱すぎたら眼中に無く強すぎたらまず下手に出るからな」

「全ての戦闘狂がそうというわけではありませんが、だいたいはそんな感じですよ。ここで話は変わりますが、貴方たちに能力についての説明をしたいと思えます。神器は生まれながらに貴方たちの中にあるので、問題は発動方法だけなのでその方法を教えたいと思います」

「いくら神器を持っていようと、解放されなかつたら宝の持ち腐れだからな。お前らの記憶は5歳になった時に蘇るようにしてあるから、その時に人目の無いところでその神器の名前を、武具のイメージをしながら叫べ。そうすれば解放される」

「それぞれの神器と神滅具の名前は――――。覚えませんでしたか？」

「(麗風と諒太) 後で5回は……」

「(俺) あと一回でお願いします」

「!!お前、俺の記憶力のなさを知ってるだろう!!」

「僕もあまり自信は……」

「だったら俺が両方覚えてやるから。二人とも必死に覚えとけ。麗風のもう片方は俺が覚えてやるから」

「(諒太と麗風は涙目ながら) ありがとう〜!」

「抱き着いてくんなくて! ほら覚える覚えろ」

そうして、アンラ・マンユはもう一回それぞれの神器と神滅具の名前を言った。

俺たちはそこから、必死に何度もその名前を繰り返して必死に覚える事に成功した。

俺は二人と違って一つだけだから、簡単に覚えられた。

だって簡単だし。

すると、スプンタ・マンユは何かを思い出したように俺たちに説明をする。

「そうだそうだ。一番大事なことを言っただけだったな。神器や神滅具にパワーアップ

性能があつてな。その名前は禁^{バランスブレイカー} 手つってな、一時的に秘められた能力を解放できる

ようになる。それに伴い武器か本人の形状が変わるようになる」

「簡単な話、槍が大きくなるとか、籠手が全身鎧になるとかですね。ちなみにどちらも

前例があります。貴方たちのはあちらに行つてからのお楽しみです」

「「お楽しみ!」」

「説明は……そうだな。細かいやつはお前たちが5歳になったときに本が置いてあ

る場所にある。お前らだけにしか分からないようになってるから安心しろ。それじゃあ、行くぜ？アンラ！」

「分かってますよ。では皆さん、お元気で」

「「ありがとうございます!!!」」

最後に俺たちはそう言い残し、次の瞬間に簡単に意識を手放した。

そして、神たちが溢した言葉を聞くことはもう永遠に無くなった。

「ハハハ！よりによってあの世界に行くとはな……………」

「それは私も同意です。……………しかし、これが因果というものでしょうか？」

「そうなるかもな…。なんせ、あそこは俺たちが死んだ世界なんだから……………」

残酷にして始まりの希望

「記憶が戻ったか……………」

とある深夜、僕は……………いや俺は目が覚めた。

唐突だが、俺の名はジャック・ノーロセス。

……………前世の名は山之内慎二。

俺は5歳を迎えたこの日、前世の記憶を取り戻した。

しかし、ここで思わぬ誤算が生じた。

更にまた、別の記憶が頭の中に入ってきたのである。

これのせいか、俺は頭痛で目が覚めたのだ。

記憶の中にあるのはいつも霧、霧、霧ばかり。

そんな中で自分は怒り狂い売春婦と思わしき女性を次々と殺している。

その数合計五人。

これだけで充分すぎるほど、この記憶の持ち主が分かる。

恐らく、いや間違いないく、〃ジャック・ザ・リッパ〃の物だ。

しかし、何故彼の記憶が俺にあるのか…？

“考えられる中で一番有力なのは、俺の前々世もしくは俺の祖先が、切り裂きジャックジャック・ザ・リッパで、あの方たちが施した記憶の蘇生術に効果で蘇ったもしくは与えられた。

しかし……俺が“切り裂きジャック”と関係してるとは夢にも思わなかった。
ん……？

もしかして、暗殺の才能は“切り裂きジャック”からか!?

ハハハ!

これから人生は波乱に満ちてそうだぜ!

あー、仕方ない。

今日はもう考えるのをやめるか…。

それじゃあ、おやすみなさい。

zzzzzz……。



おはようございます。

今日は早速の朝ご飯を食べてから、我が友たちに会いに行こうと思います。

ご馳走様でしたー!

俺は間食した後、歯磨きしてから我が友の家に走り出した。

俺が生まれた場所は、質素だが貧相ではない微妙な位置の村っぽい。

そのため、俺も含めてこの村にいるのは300いつてるかどうかと、非常に数が少ない。さて、そんな事を考えてる内にどうやら着いたみたいだ。

俺はその家のドアをノックして叫ぶ。

「リヨウくん！あーそーぼー！」

すると、とてとと可愛らしい音が聞こえ、ドアが開かれ、そこから出て出て来たのは黒髪のクール系美少年だった。

そいつは俺を見て笑顔になり、一緒に遊ぼうと、もう一人の親友の家へと向かった。ちなみに俺の容姿は白髪の可愛らしい顔となっている。

そのせいで「男の娘」と勘違いされがちだが、俺はそのつもりは全くない。

俺は一先ず記憶を戻ったは良いが、他の奴ら………転生者はリヨウともう一人なのは間違いないので、そいつらの記憶が戻ってるかが問題だ。

纏めて確認したいのもう一人も一緒に遊ぶついでに確認しようと思う。

さて、もう着いたみたいだ。

さつきと同じようにドアを叩いて、叫ぶ。

「エルザー！一緒にあーそーぼー！」

「はーい！」

俺の声に可愛らしい声が返ってきて、ドアが開かれる。

そこから現れたのは緑髪の可愛らしい少女は俺を確認すると、速攻で抱き着いてきた。

嬉しいんだけど、ちよつと痛いです……。

「なあなあ、これで全員揃つたし、何して遊ぶ？」

俺の心情を知つてか知らずか、リヨウがそんな事を言う。

そこで俺はすかさずに森で遊ぶほうと言つた。

言い忘れていたが、この村は森で囲まれており、そこから木の実や木材を収穫・入手し、畑を耕す肥料作りをして自給自足で過ごしている。

それとは別に、子供たちの遊び場にもなつてるのである。

森に入つて村から少し離れた所まで行くと、俺は振り返り二人に確認を取る。

「塵も積もれば？」

「山となる」

「壁に耳あり？」

「障子に目あり」

最初がリヨウで、次にエルザが俺の問いに答えた。

俺たちは互いに近づき

「「ばああん！（無言のハイタッチ）」」

を決めた。

そして、真っ先にリヨウ＝諒太が口を開く。

「全員記憶が戻ってるを呈に話していいんだよな？」

「ああ、良いぞ」

「俺たちは全員、記憶を取り戻した。おけ？」

「「おけ（親指を立てる）」」

「そこで、確認を取りたいんだが……お前らは知らない誰かの記憶とかないか？」

「…………お前もか」

「僕もだよ……」

「やっぱりか……。それが誰かの記憶かは？」

その時、俺は言うか、迷ってしまった。

なんせ俺の持つてる記憶はかの『切り裂きジャック』だ。

あの世界的に有名な殺人鬼だ。

いくら、快樂のためにやってないとは言え、殺人を犯したことに変わりはない…………。

しかし、エルザ＝麗風が自分の記憶を先に語ってしまう。

「……………僕の記憶はエルキドウのだったよ」

「!!!？」

「最初に森の中で生まれたところから、最後にエルキドウの親友らしき人物が僕を看取つてた所までの記憶があるから間違いないと思うよ」

それを聞いたリョウは、何かに領きながら自分の記憶を語り出す。

「俺の記憶は項羽だ。記憶にあるのは一人の女性と敵を獲物で薙ぎ払つてることばかりだったが、その女性が俺のことを項籍様とか言つてたから間違いない」

俺は幼馴染み達の記憶がどちらも大英雄だったのに、俺は自分を恥じていた。だつてそうだろう？

二人と違つて俺は反英雄的存在だ。

俺の記憶を聞いて、二人は幻滅するだろうか？

俺の記憶を聞いて二人から距離を置かれたら？

俺は、俺は――

「それで、お前の記憶は誰なんだ？」

不意に諒太の声が聞こえた。

俺はその諒太の顔を見たとき、自分は何を考えていたんだらうか。

「僕は、いや僕たちは君がどんな人の記憶だろうと君の親友さ。だから話してごらん」
ああ、やつぱり、俺には勿体ないくらいの友人たちだ……。

話してみてもいいかな…。

「俺の記憶は『切り裂きジャック』だったよ……」

「……………」

その時二人はとても驚いた顔をしていた。

「やっぱり、だめだっ……………」

「へえ、存在してたんだな」

「かつこういいく！正しく闇夜に潜む暗殺者って感じで良いじゃん！」

「そんな事無かったわ……」

「寧ろ何故か喜んぶる……」

「心配した俺が馬鹿だったな……」

「さて、全員の記憶も確認したことだし、メインディッシュでもいくか」

「メインディッシュ……………？あー、神器の解放か」

「そうだ。取り合えず2つ持ちのエルザから行くか？」

「おっけー。確か……………解放、『天の鎖』！」

エルザがそう言い放った瞬間、彼女の周りから金色の鎖が彼女を守るように現れた。

しかも、なんか蛇みたいに動いてる…。

「効果とかって分かるか？」

「ちよつと待って、鎖から聞いている」

「え？聞けんの？」

それから少しして、彼女は何度か頷いて、聞き終わったのか俺たちの方に向いて笑顔で、口を開いた。

「私の『天の鎖』は神性………神に係り合ってる成分みたいなもので、それが高ければ高いほど相手の拘束力を高めるみたい」

「へえ、MAXでゼウスとかオーディンクラスも縛れるのか？」

「上限は無いみたい」

「鬼強じゃん………」

相手が神話勢だとしても返り討ちにできちゃうことだろ？

普通に強いんだが………。

「じゃあ、次は皆で行くか」

「分かった」

「いっくよー！せーの、」

「解放、『民の叡智』！」

「解放、『機界王子』！」

「解放、『偽り写し記す万象』！」

その瞬間、俺たちの体に変化が生じた。

俺の両腕が幾つもの朱い模様で描かれた獣のような腕に成り、リヨウの頭に装置のよ
うなヘルメットが被らされ、エルザには先程まで付けてなかったネックレスが現れた。
もしかしくなくてもこれが神器もしくは神滅具なのだろう。

効果は分からないが、強いのは間違いないはずだ。

それから、この状態で何ができるのかと試していたら、かなり時間が経っていた。

そう言えば、忘れていたが、スプンタ様が詳しいことが書いてある本があるとか言っ
てたな。

今日はお母さんに早めに帰るよう言われてたし、もう日も大分下がつてきたから帰る
か。

そうして、俺たちは帰路に着いた。

しかし、歩いて十分してから変な臭いがし始めた。

それは混ぜてはいけない何かが無理矢理混ぜたような——。

俺がそう思ったとき、リヨウが走り出した。

思わず、「リヨウ！」と叫んだら動きが止まって此方を見る。

その顔は何か焦ってるような感じがした。

そして、リヨウが次に発した言葉で俺たちも無意識に走り出した。

「この臭いは、血と火の臭いだ！」

まずいますまずいます!!

俺らのせいかな？

もしかて、俺らが神器を解放させたから？

とにかく家族が無事という一縷の望みを胸に抱えながら、俺らは走った。

しかし、現実はなんと無情なのだろうか。

村は燃え、中からは絶望の悲鳴と狂気に満ちた笑い声、何かが潰れたり引き裂かれるような音が聞こえてくる。

内心で嫌だ嫌だと思いながらも勇気を振り絞って中に入る。

そこにあつた光景は……………

自分の親が見るも無惨な姿で息絶えてる姿を唾いながら踏み潰してる黒い羽を生や

した人間のような者達だった。

その瞬間……俺の意識は消えた。



今、村を襲っているのは「はぐれ悪魔」と呼ばれる、何らかの理由で主人を無くしたもしくは捨てられた者達だった。

彼らにも主人はいたのだが、今までの悪行がバレて監獄行きとなってしまったので自分達も捕まるのでは？と思ひ逃げてきた連中である。

しかし、その途中で「はぐれ悪魔」の一人が神器の気配を感じてしまったので、その神器を奪って自分の物にしてしまおうと考えてしまったのである。

村に着いては早速、魔法で火を付けた。

そこから、地獄始まった。

男は苛烈なまでに甚振り、女は犯してから殺すという自分達のやりたいように暴れていた。

恐らく、優越感に浸りたかったのだろう。

その証拠に彼らの顔は狂気と万能感に満ちた顔をしていた。

だが、彼らの運命は定まってしまった。

悪魔の一人が村の入り口付近を見ると、そこには三人の子供が立っていた。

背丈からして5歳くらいだろう、それぞら髪が違う色をしていた。

しかし、悪魔は気付いた彼らの内のどれかが神器使いだろうと踏んでいた………が、次の瞬間に仲間の一人の首が飛んでいた。

いったい何が……、と思つて周りを確認すると、その死体の近くに一本の黄金の鎖が浮いていた。

原因はその鎖の切っ先にある刃。

その刃の大きさは短剣程度だが、一人一人の首を飛ばすには充分すぎた。

しかし、脅威はそれだけじゃない。

誰が操つてるのかは分からないうちに黒髪の男の右手が光の剣と化し、その切っ先を此方へ向けたと思つた瞬間、その延長線上にいた「はぐれ悪魔達」が光の剣により切り裂かれた。

鎖が、光の剣が、今も悪魔を葬つてる中、更に脅威は増える。

白髪の子供の全身が、人狼の形になるが、人狼と違うのは全身が眼と口以外全てが真つ黒と言うことだろう。

それは毛などでは無く、真つ黒な何かで覆われてることに「はぐれ悪魔達」は気が付く事は永遠になかった。

その十二力は、「はぐれ悪魔達」との距離を、子供では有り得ない筋力で一瞬で詰め、

眼前にいた悪魔をその獯猛な爪で切り裂いた。

それに恐怖し、悪魔達が後退った瞬間、その中で最も後方にいた悪魔の首が飛んだ。当然、その正体は黄金の鎖。

気が付けば、最初は十数人いた悪魔達の残りは四人となっており、飛んで逃げようとした一体の悪魔は鎖で足を縛られ、黒髪の子供の腕から放たれた光線により一瞬で消滅した。

残りは一人ずつ、それぞれ子供たち一人ずつの餌食となつて、“はぐれ悪魔達”は全滅したのであつた……………。



俺はふと、意識を取り戻した。

景色は変わらず、悲惨な光景しか映らない。

しかし、体に違和感を感じたので全体を見ると、なんか真つ黒だった。

しかも手とか足とかも獣みたいになつてた。

数秒後にその俺の体は萎んでくように縮んでいき、最終的に元の体へと戻つていった。いったい何だつたんだろ……………!?

急に視界に入ってきたものが入り、思わず飛び退けてしまい、それを見てしまう。

それは、R18レベルのグロさで横たわる、俺たちの村を襲つたやつ死体だった。

前世の俺だったら間違いなく、吐いてたはずなのに、今は少し気分が悪い程度で済んでるのが謎だ。

…ハッ！

リヨウとエルザは!?

そう言つて周りを見回すと、お互い少し離れているが無傷ながらも意識を失つてるだろう二人がいた。

俺はエルザから一人ずつ運び、比較的被害が少ない家の中に連れ込んだ。

生きていたベッドに運び終わったは良いものの、……………これからどうして生きていくのか……………。

この年齢じゃ、働けないしな…。

はあ……………。

俺が近くにあつた椅子に腰を下ろして、内心嘆いていると、隣にある本棚に目が行つた。

しかし、その中でも一冊だけ存在感が違う本があつた。

俺は確信する。

これこそが、あのお二方が仰っていた本なのだろう。

俺はその本を手に取り、一頁一言一句見逃さないように集中しながらその本を読むの

だった。

「ん…………、あれ？ここは…？」

窓から日差しが差し込む中、どれだけ時間が経ったのか分からず、読んでる途中に不意にそんな声が聞こえた。

その声に体が反応し、その方向に体を向ける。

そこにはベッドから上半身だけ起き上がらせて眠そうに目をこすってるエルザがいた。

「大丈夫か!? 怪我とかしてないか？」

「お、落ち着いて。僕は大丈夫だから…」

思わず声を大きくしてしまったが、彼女は無事みたいだ。

そこで、俺の声で起きたのか、リヨウも上半身だけ起き上がらせて、俺の方を見た。

「……………おはよう」

「その間が恐かったが……………おはよう。どうやらお前も無事みたいだな」

リヨウは朝に弱い。

そのため、普段は起きてから三十分は寝惚けてるが、今回はそう普段通りにもいかなく、彼は一瞬で覚醒した。

そして、悲しそうな顔をしながら口を開く。

「そうか……。守れなかったか……………」

「ああ……………」

「ヒグツ。ヒツ、うわあああああああー！」

起きてから耐えてた涙がここで、決壊した。

エルザは泣きじやくり、リヨウも静かに一筋の涙を溢した。

俺も悲しい……………だのに、涙が出ないんだ…。

しかし、ここで悲しんでるだけじゃ、俺たちは前に進めない。

泣いてる二人を見て、俺は真剣な眼差しで二人に提案をする。

「なあ、一ついいか？」

「……………なんだ？」

「ヒグツ……………なに…………？」

二人が反応をしたのを確認して、俺はその提案を告げる。

「俺たちで組織をつくらないか？」

「「組織…………？」」

訳が分からないようにしてる二人に俺は説明をする。

「そうだ。俺らみたいに、人外に被害を受けた人達を保護して行く組織だ。俺らが強

くなれば、それに伴って組織も強く、広くなつていくはずだ。そして、その分、被害に遭つた人達を保護しやすくなり、時期がくれば保護したその人の行きたいところに行かせて、その人が無事に過ごせるようにしてやる。どうだ？俺らは三人いたから、こうして無事にいる。しかし、一人だけだったなら、俺は己を犠牲にしても復讐の道に走っていたはずだ。俺たちみたいな奴らを増やさないためにも、一緒に来てくれないか？」

俺はそう良い締めくくり、二人に手を差し出した。

それを聞いた二人は、呆けた顔をしていたが、数瞬した後には笑顔に成り、俺の手を取つた。

「良いじゃねえか！最高じゃないか！お前がそうしたいというなら、俺は喜んで協力してやる！」

「僕もだよ！もう僕たちみたいな人達を増やしたくない！共に行こう！未来ある人達のために！」

俺はその言葉に泣きそうになつたが、堪えて宣言をする。

「俺、いや俺たちはここに宣言をする！特別な力を持つたからと言って、居場所をなくした者達の居場所をここに作ることを！そして、その者達が笑つて幸せと言える明日を共に作っていくと！」

そう言つて終わりにしようとしたが、リヨウとエルザが更に宣言をする。

「我らはここに宣言する！無力な者達を我らの手で守り抜くことを！そして、あらゆる種族、性別、年齢、強さ、全てに於いて一切の差別・侮辱をしないと！」

「僕たちは先駆者であり、開拓者であり、未来そのものだ！己の信念を貫き通す覚悟を決め、弱者には手を差し伸べ、罪人には鉄槌を下す覚悟を持つ必要がある！そして、共に行こう！決して誰も後悔などさせないことをここに誓おう！」

その言葉に合わせて、俺は組織の名前を決めた。

その名は————

「「我らの名は、ピリニア・ノア信念の方舟」」

ズレた歯車が回り出す少し前

あれから二十年の時が経った。

俺たちが組織を結成してから、あの村全体をエルザ……………エルキドウの『民エイシ・オブ・パピロンの叡智』によって地下深くに埋め、俺たちはその上に拠点作る事にした。

勿論、使える物は全て回収させて貰ったが……………。

今はこんなしんみりとしても過去が戻ってくるわけじゃ無いから、話を変えよう。

まずは、俺たちの活動資金についてだが……………。

最初の頃はいくらか借金もしたが、リヨウ……………。項羽ロンギヌスの神滅具アンノウン・デイクテイター『機界皇子』に

よる超チートとも言える、脳の一部を改造して得た超高性能高速演算処理能力により、カジノや競馬、最終的には株価の具合の結果を予測したためにかなり儲かり、今や十年ぐらい遊んでもお釣りが来るほど金がある。

だからといってその金で遊ぶつもりはさらさら無いがな。

まあ、項羽がそのお金を稼いでくれたおかげで何人も神器使いを養うことができたのは嬉しいことだ。

実は俺たち、最初の頃に保護するは良かったが、資金が全然貯まってなかったので、質

素な生活をしていたが、そこで冒頭に話したとおり、項羽が稼いでくれたおかげで、保護した人達は裕福な生活を送れてる。

だが、そうしてる途中で俺はとあることに気付いたのだ。

それは、保護した奴らがここで過ごししていく内に我が儘で傲慢な奴らになってしまうのではないかと。

だってそうだろう？

元々は気の弱い男だったのに、裕福な家庭で暮らしていく内に性格が変わって、人を見下すような態度を取ることなんてよくある話だ。

そこで、俺たち三人のそれぞれ役割分担を決めた。

・俺、慎二ことジャックⅡ「ジャック・ザ・リツパー」は『教育・戦闘訓練』

・諒太ことリョウⅡ項羽は『資金調達・技術開発』

・麗凧ことエルザⅡエルキドウ『神器使い・被害者の発見・保護』

と言った感じだ。

それぞれ有能な人から数人選んで、その人たちを司令塔にして今現在も行動中だ。

そんな俺だが、今現在何をしてるかというと、休憩タイムだ。

俺が担当してるのは高等部だが、結構大変で時折こうして休憩しているのだ。

俺たちが住んでる本拠地は住居スペースや娯楽スペースが混同してるので下手な学

園よりも広く、今現在の我が『信念の方舟』に在籍している総人数はもうすぐで四桁行ききそうである。

えー、実はこの人数、神器使いだけじゃありません。

単純に孤児だったり、主人に耐えられず逃げた者達など、人外が集まりすぎた結果こうなった。い」だったかそこから逃げ出した者達など、人外が集まりすぎた結果こうなった。

そして、大人の数が回らなくて非常に少なくて困ってます。

なんせ、この組織の創設者である俺含めて数十人しかいないんだぜ？

笑えてくるぜ。

偶に同じ神器使いを保護してる組織「神の子を見守る者」から人を派遣して貰っては一緒に働いて貰ってる。

そうまでしないと、ここは回らない。

ちなみに、その「神の子を見守る者」は堕天使で結成された組織で、俺の所に来るのは大体コカビエルさんという五対十枚の堕天使の大幹部とその部下達だ。

そのコカビエルさんが当初ここに来たときは、いきなり戦闘を仕掛けられ、相打ちになつて終わったのは良い思い出だ。

それからコカビエルさんとはよく酒を交わす仲になれて良かったと思う。

おっと、俺ばかりの話になつてしまったな。

今度は項羽の話にしようか。

まず最初は俺が何故リヨウを項羽と呼ぶのな？

それは本名の露呈を防ぐためだ。

バレたら偽名の中でも使ってる名前がバレてしまうからだ。

まあ、本名を悟られたくないということで、そこは一端置いておこう。

次は彼が今何してるかでも話そうか。

彼は今、軽く起業の手伝いをしている。

そう、起業だ。

アイツ自身は働かなくても、アイツの『機界皇子』アンソウン・デイクテイターで編み出した革新的技術と有り

余る金を起業したばかり所に投資して更に資金を調達してる。

何故そうしてるのか聞いてみたところ、自分の武器集めも兼ねてるのだそうだ。

『機界皇子』はあらゆる機械・電子機器を司る能力を持つているため、材料さえあれば

兵器も簡単に作れるのだ。

しかし、その肝心な材料が中々集まらないので、起業した会社を手助けをする代わりに、

製品の一部をもらい受けるようにしてるらしい。

ただ、その手を付けてる企業の数も数十にまであるので、アイツにとってはもはや宝

の山らしい。

俺は機械に詳しく無いから分からんけれども。

あ、そう言えば、最近、曹操が尊敬してくれるのは良いが、悪い意味ではないが変な方向に向かってるとか言ってたな。

まあ、アイツは俺よりも強いからな。

あ、曹操と言うのは中国の英雄の名前なのだが、そいつは曹操の子孫とのことで、自分の名前を曹操にするほど尊敬しているらしい。

出会いは俺たち……主に項羽の資金稼ぎが軌道に乗ってきた頃、まだ人数もいなかったので項羽とエルキドウの二人で神器使いを探して、森の中にいたところを当時10歳の曹操に急襲されたらしい。

ちなみに、その時の俺たちの年齢は15歳だ。

エルキドウが対話を試みたが、話を聞く気が無かったので項羽が一騎打ちを申し込んでみたらしい。

それを聞いた曹操は、相手が只者ではないのを察したらしく、名を聞かれたので項羽が自分の名を告げた途端、急に膝をつけて弟子入りを志願してきた。

突然の事態に項羽とエルキドウは、訳が分からないようだったが、曹操はあらゆる英雄を尊敬してると言い、その中でも断トツに尊敬していたのが、関羽と呂布、そして項羽だったらしく、襲ったことを謝罪しながら是非仲間にして欲しいと頼み込んできたの

である。

それに項羽は承諾し、仲間になる条件に一般教養を学んでからと言ったら、曹操のやつ、教育設備が整うまでの間に殆どの一般教養を頭にたたき込んで、僅か二年で小学校から高校までの知識を頭に入れ、項羽の部隊に最速で入りやがった。

その時の年齢、何と14歳である。

どんだけ、入りたかったのやら…。

ちなみに曹操の神滅具所有者で、その名も『トゥルー・ロンギナス黄昏の聖槍』。

そう、あらゆる神滅具の原点にして頂点、最強とも言われている槍型の神滅具だ。

出会ったばかりの頃の彼はまだ『バランス・ブレイク禁手』は出来てなかったが、今となっては『

禁手』はおろか『亜種禁手』にまで至っている。

戦闘センスも高いことは高いのだが、彼は肉弾戦よりも頭脳戦に向いており、項羽に次いで頭が良い。

何故項羽をだしに使うのかは、分かっているとと思うが、彼は『機界皇子』の能力で半ばコンピューターと化してるので、逆に彼に勝てる人間…：人外でも勝てるやつっているの？

しかも、コンピューターが持ち得ない感情も持っているために、人の心も理解できるから、ぶつちやけ鬼強である。

しかもアイツが「禁手」状態になると、謎形態になる上に馬鹿みたいに強いからな。
一対一で戦えるのはエルキドウぐらいだろう。

あいつの『民の叡智』と『天の鎖』という、両方とも物量戦に向けた能力を持った神器と神滅具で、項羽に予測出来ても対処不可能な量の攻撃を全方位から攻撃してくるから、あいつはあいつでおかしい。

あ、俺？

俺は正面切つて戦うと幹部よりも弱いよ？

だって俺は暗殺者だぜ？

そんな正々堂々戦うより、絡み手とか卑怯と言われる戦法でしかあの二人を相手には出来んよ。

あ、そう言えば、ランクとか階級の話はしてなかったな。

階級で言えば、俺とエルキドウに項羽の三人がトップで、その下に設置してある各部門の長が幹部と言う形だ。

そこから下は細くなるのでこれ以上はやめよう。

ちなみに、さっき言った曹操は技術部門の長だ。

他にも育成部門、生活部門、生産部門とか色々あつて合計で幹部は十数人いる。

あー、そろそろ彼女の話でもしようかな。

と、その前にここで、重要なお知らせがある。
なんと、俺とエルキドゥ。

結婚する事が出来ました！

どういうわけかと言うと、実は麗風のごとは前世の頃から好きだった。

しかし、この気持ちを告げてしまうと、今までの関係を崩れてしまうのではと恐怖した。

いや、これは言い訳か…。

だが、その気持ちを告げる前に死んでしまった、と思つたら第二の人生の幕開けだ。

だから、この生の中でいつか思いを告げよう、そう思い早十年、人生の最大の危機が起きた。

墮天使達との戦争である。

実は俺たちと墮天使は最初から仲が良かったわけではない。

あちらから交渉してきたのだが、当時俺たちは人外を信用出来ていなかったために、その交渉を突っぱねたせいで、墮天使達の総督であるアザゼルが、もし万が一にも暴走してしまつたら危険と判断し、こちらに墮天使達を攻め込ませたのである。

その数は1000人。

こちららも必死に応戦したが、僅か数時間でこちららが壊滅寸前になってしまった。

それもそうだろう。

成人もしていない人間の子供たちが、人間と比べたら永遠にも近い時を過ごし、翼で空中戦法を取れる墮天使達に勝てるわけもないのだ。

そんな絶体絶命の状況の時、俺はその状況で「禁手」に至った。

俺の神滅具『偽り写し記す万象』^{ロンギスス・ヴェルグ・アヴェスター}は、俺の影みたいな物が俺自身に纏わり人狼の姿をまねた姿を全身か一部に模倣できたり、単純に敵から受けたダメージを倍にして相手に返す技なんだが、俺は未熟で一人にしか返せなかつた。

その状況で得た俺の「禁手」、それは、『死滅願望求める四夜の終末』^{アセク・フォール・デッドエンド}。

その効果は、『偽り写し記す万象』^{ヴェルグ・アヴェスター}の効果を凶悪にしたものである。

そこで、俺の「禁手」が発動した瞬間、満身創痕だった味方の傷が消えた。

ただ、その代わりに俺が何十倍もの痛みを味わうことになり、気付いたときには巨大な化け物になっていた。

俺はその時、痛みで何も考えられず、敵を滅することしか考えてなかつたのか、俺は次元が割れんばかりの咆哮を墮天使達に向けて放った。

その咆哮を浴びた墮天使達は、今までむきずだったにも関わらず、急に傷だらけとなり地面に落ちていった。

傷だらけになりながらも空中に残ったのはアザゼル、コカビエル、バラキエルと言う

上位陣しか残ってなかった。

俺はその時に気を失って、ここからは聞いた話になるが、俺の体はやがて元の体へと戻り、地面に倒れ込んでしまったらしい。

傷だらけで戦闘可能なのは残り三人となった墮天使と、俺のせいで無傷となったこちら側は百数十人の睨み合いが始まり、突如として墮天使達の地面に謎の紋様が描かれた光が現れ、急に激しく光り出したかと思うと、墮天使達の姿は消えていた。

項羽のリーダーでも確認したが、しつかりと墮天使達の反応は無かったらしい。

恐らくだが、それは転移魔法で、墮天使達が用意した緊急用の魔法なんだろうと踏んでいた。

それから俺は目覚めてから、エルキドウと項羽に泣かれた。

ナニゴト!?!と、思ったら俺はどうやら二日も目覚めなかつたらしく、泣きながらそう説明された。

それから一週間経ったが、何事も無く過ぎしていく、中、俺はとある決意をした。

その日の夜、俺は麗風を本拠地の外れに呼び出した。

俺が準備していくと、月光に照らされ神秘的なまでに美しさが爆上がりしてるエルキドウが先に待っていた。

俺は彼女に声を掛けると、彼女は振り返り、俺の方に向き直る。

そこで、軽く雑談してから、俺は彼女へ片膝を地面に付け、懐から一つの小箱を取り出した。

それを彼女に見えるように両手でそれを開ける。

そこに入ってたのは指輪だ。

指輪の中に埋め込まれてる宝石の名は「ダイヤモンド」、意味は「永遠の絆・純潔・永久不変」。

少し天然だけれど何所をとつても綺麗な彼女に「純潔」を、俺の気持ちを証明するために「永久不変」を、これからも続くであろう我ら二人の絆に「永遠の絆」を。

そういう意味を込めて、この指輪を選んだ。

そして、俺は彼女に突き出し、言ったんだ。

「結婚してください」
ってな。

彼女はそれを見て、涙を流しながら、「飛ばし過ぎるよお」と笑っていたが、条件付きで承諾してくれた。

その条件とは「成人したら結婚すること」と「勝手に死なないこと」の二つだった。

一つ目は納得だったが、二つ目は、自分の目の届かないところで勝手に死なないでと言う物だった。

彼女曰く、俺を死なせたくないらしい。

まあ、それは俺も同じだ。

俺もお前らを死なせたくなは無い。

俺はそれを了承し、エルキドウと共に帰ろうとして後ろを振り返ったとき、もう一人の親友の姿が見えた。

右手にカメラっぽい物を持って……………。

その姿で何をしてたかを理解して固まった俺たち二人に、項羽は「ちゃんと麗風のこ
と幸せにしろよ？ じゃないと許さないからな。あ、式は期待しとけよ。盛大にしその数
秒後にといてやるから。では、アデュー♪」と言い残し、背中からジェット機の翼のよ
うな物を生やし、どこかへ飛んでいった。

その数秒後にハッと我に返った俺たちは鬼神の如く項羽を日が明けるまで探したが、
見つからなかった。

まあ、そんな事があり、エルキドウとは今も仲良くやってる。
今は遠征中だけど……………。

あ、墮天使達とはどうやって仲良くなったのかって？

それは五年前、とある任務で墮天使達と目的が被ったのだ。

それは『「オズの魔法使い」の殲滅』。

「オズの魔法使い」というのは「灰色の魔術師」の中で意見が分かれて分裂した者達が集まって出来た結社で、複数の反社会組織にも協力をしている危険な奴らである。

奴らの拠点は「次元の狭間」という、様々の世界の隙間に存在する、通常の生物が入った瞬間に体の維持ができずに消滅してしまうような危険な場所にある。

なので、俺たちは次元の狭間に入れるように独自に開発した、一度起動すれば極薄の結界が体を纏うように発動して、一ヶ月は「次元の狭間」でも維持できるようにした。

だが、俺らだけじゃ不安だったので、力を借りる事にした。

それは、神話勢力。

俺たちが目を付けたのは「北欧神話」と「中国神話」だ。

何故この二つなのかって？

それは事前に調べた神話勢力の中でも主神が強力且つ親しみやすいであろうと実践だからだ。

それからどちらにも、こちらから使者を送った際に使者と一緒にそれぞれの主神であるオーディン様と帝釈天様が来るとは思わなかったけど………。

恐らく、どちらも俺らが提示した物に食いついたか。

俺らが協力した際にお互いに交易を仕様という呈で、こちらが出したのは人口神器

だ。

それを作ったのは、実は項羽で、アイツが剩りにも沢山の神器使いを解析しすぎたせいで、もしかしたら人口神器を作れんじやね？と思ったのがきっかけだ。

アイツは当時は脳が半ばスーパーコンピューターと化していた状態で、人口神器の計画を試行錯誤した結果できると判断したので、作ってみたところ半年でできた。

しかも、本人と融合しない状態で。

ちなみに、これは六年ぐらい前の夏頃に完成した。

まあ、これは流石に俺でも異常だと思う。

なんせ、神器が使い捨てで使用できんだぜ？

しかも大量に。

もう、項羽には一生頭が上がらないよ。

だけど、アイツでも弱点があるんだよ。

それが、外交である。

アイツは相手の性格を脳に書き込んでからそこから相手がどう思考するかを読めるのだが、いかんせん自分の感情が顔に出てしまうのだ。

だから、交渉ごとは基本俺の部門が担当してる。

しかし、当時の状況はトップである俺たち全員で相手をしなきゃいけないので、仕方

なくいつか敵から手に入れた鬼の骨のような白い仮面を付けて貰い、臨むことにした。

そして、結果的に言えば、協力を得ることは出来た。

相手は俺たちが墮天使を退けた事を知ってたらしく、「あの若造もまだまだじゃのう」とか「H A H A H A、お前ら若いのによくやったN A！」とか言ってたな。

まあ、人口神器の制作方法は秘密にしたが、その代わりに『信念の方舟』^{ビリーヴ・ボート}だけが生産してる高級果実「信念の林檎」^{ビリーヴ・アップル}を少し多めに融通することにした。

作つたは良いものの、これ以上稼ぐ必要も無い上に人界に出すわけにも、スポンサーもないので売り出しができなく、仕方ないので俺らだけで食ってる果実なんだが、これが異常に美味しくて拠点にいる皆に好評なのだ。

しかし、出来てから少しして収穫量が多すぎて在庫状態なのが出て来たので、公益のネタにならないかと試食してもらったら、どうやらあちらの主神方にも好評だったので、栽培方法が記された紙と一緒に「信念の林檎」^{ビリーヴ・アップル} 交易することにした。

結果としては今回の『オズの魔法使い』の殲滅』が完了したら、交易を開始することに。

交易内容としてこちらは

・人口神器の提供

・「信念の林檎」の輸出による融通

- ・人材の派遣

- ・交互不戦の誓約

対してあちらは、

- ・戦力、人材の提供

- ・領域入出許可証の提供

- ・交互不戦の誓約

と、大まかなのはこう言った具合だ。

他にも細かい内容はあるが、今は省こう。

本當、あの時は大變だった。

東西南北を守護してゐる四人の強力な魔女を倒してからじゃないと、ボスが住む城は現れないとのことなので、事前に潜入捜査させておいた人から情報は仕入れていたので後は準備を整えてから突入となつたのだ。

準備が整うのに一年かかり、四つの部隊に分け、突入することに。

“北の魔女”担当は、我ら『信念の方舟』チーム。

リーダーの俺、サブリーダーにエルキドウ、項羽を入れ、幹部の内の八人、後は各部門の部下たち。

合計約六百人

「東の魔女」担当は、『北歐神話』チーム。

リーダーは雷神トール、サブリーダーはフレイヤ、後は神兵らしき人達。
合計八百人。

「西の魔女」担当は、『中国神話』チーム。

リーダーは鬪戦勝仏にして齊天大聖こと「初代孫悟空」、サブリーダーに？
☒太子、幹部っぽい人達も含めた兵士達。

合計約五百人。

「南の魔女」担当は、『三大勢力連合』チーム。

リーダーをアザゼル、ルシファー、レヴィアタン、ガブリエル、サブリーダーにココ
ビエル、グレイフィア、ウリエル、一般兵士達。

合計約千二百人。

………これには俺も驚いた。

なんせ俺らと半ば敵対していた勢力がいきなり、連合組んで味方となったんだぜ？

どういうわけかと説明をしてくれたのはまさかの北歐神話の主神のオーデイン様で、
「あの青二才共もいい加減ウザつたいから争いをやめて、偶には協力しあつて一大勢力
の一つは潰してこい」とのことらしい。

そして、俺たちは「次元の狭間」で体を維持できない奴ら全員に結界が発動するペン

ダントを渡し、空間座標を四方に魔女が住んでるといふ城に指定し、〃次元の狭間〃に転移してから、「オズの魔法使い」との全面戦争に入った。

結果的に言えば、勝った。

俺たちはあの手この手でこちらの攻撃を相殺してくる魔女に苦戦を強いられたが、なんとか倒すことが出来た。

最終決戦は各チームの幹部以上の全員だけで臨み、最後に最終形態となり、人の姿をやめて、どこぞのシシ神の如く姿で巨大になったボスに、何とか致命傷を与えて、回復できないところまで追い込んだ。

だが、やけになったボスが今まで溜めてきたという〃次元の狭間〃の力を使った自爆攻撃で俺たちを道連れにしようとしたが、突然の龍神の一角である『アボカリユプス・ドラゴン真なる赤龍神帝』グリードレッドの乱入により、ボスは消滅。

そこで、俺たちの戦争は終わりを告げた。

その終わってから一ヶ月後、オーデイン様から勝利祝いと宴の招待状を貰った。

ここで断ると信頼性がなくなるので、今回参加した幹部以上の者と、幹部ではないが先の戦いで活躍したという者達を連れて参加する事にした。

その宴が始まる前、俺は皆と少し遅れてから宴会場の入り口手前付近でアザゼルと

ぼったりと出くわし、相手は何やら色々混ぜたような複雑そうな表情をしていたが、俺は丁度良い機会だと思い、アザゼルに交易をしないかと誘った。

相手は渋っていたが、昔にこちらが勘違いをして墮天使達を襲ったことを頭を下げて謝り、アザゼルは神器について異常に詳しいと聞いたので詫びに人口神器に付いて、共に研究しないかと誘ったら一発で食いついてきた。

そこからなんだかんだで仲良くなっていき、今もお互いに人材を派遣し合う仲となっている。

よくよく思えば、結構色濃い人生を送ってるな……。

少し前までお互いあんな険悪だったのに、今となってはアザゼルと項羽は大の仲良しとなってるからなー。

あ、そうだ。

去年項羽も結婚したんだよ。

お相手さんは虞姫という別嬪さんだったな。

なんでも前々世の「項羽」の妻と同じ名前らしいな。

なに、確かに綺麗だったが俺のエルキドウの方が一番なんだからな？

そこは譲らんからな覚えとけよ？

ズレた歯車は回る、どこかが欠けようとも

「よお！林檎あるか？」

「アポ無しでやってきて第一声がそれってどうなんだ？総督さんよお？」
とある日の夜。

その日は高等部の生徒達がテスト期間で、今、俺は執務室でそのテストの採点の途中で、墮天使の総督であるアサゼルがやってきた。

いつもは連絡してから来るくせにアポ無しとかは珍しいな。

「良いじゃねえか。あの林檎は本当に美味いからよ。あのドラゴンアップルと同等かそれ以上だぞ？」

「ドラゴンアップル……………確か悪魔が育ててる果実だったな。まさか、悪魔も同じ林檎を育ててるとは思わなかったが」

「お前のその偏見もまだ抜けないか…」

「こればかりは厳しいな。少しずつだが、回復はしてるし、あの時の奴らは今の俺なら一息で殺せるが……………未だにあの時のことを夢で見ってしまう…」

アサゼルが言ってるのは俺たち……………『信念の方舟』の3トップである俺ことジャック、

項羽、エルキドウの三人は幼い頃に村を悪魔に焼かれたことについてだ。

目の前で、親が、友人が、知り合いが、愉悅に浸っている顔で犯し、甚振り、殺されたのだ。

その時の俺たちは森で己の身に宿ったについて神セイクリッド・ギア器について確認してたので、俺たちに身体的ダメージは無かったが、精神の面ではズタボロだった。

その悪魔達は気付けば無残な姿になっていたので、恐らくだが、俺たちは無意識的に神器を使つてやったのだらうと思つている。

詳しい事は誰も見てないから断言できないが、間違いは無いだらう。

それでも、いくら俺たちが強敵つたとは言え、あの時の事が忘れられず、悪魔、その中でも「はぐれ」には厳しいな反応になってしまふ。

恐怖の裏返しみたいなものだと思つて構わない。

だが、今はこんな事を話してる場合じゃ無いと気づき、アザゼルに問う。

「そういや、何でアポ無しで来たんだ？いつものお前なら事前に連絡とか超越すだろ？」

「……それがよお、こちらとしても切羽詰まつてんだ。俺んとこの馬鹿が、俺ら幹部に自分を認めて貰いたいと勝手に動いててな……。そのせいで神器持ちの人間や力のある人外を喰らつてるっつー情報が出てな。そのせいでこちとら色んなとこに頭を下げ

に走り回んなきやいけなくなったのさ」

「……………大変だな…」

「ほんとだぜ…。だから、その事で頼みに来たんだ」

「なんだ？一緒に頭下げろってか？」

「いやいや、それは俺らがやるからよ。——頼むのはウチの馬鹿共の捕縛もしくは処分だ」

その発言に俺は酷く驚いた。

彼は他の墮天使と違い、どちらかと言えば平和を好むほうだ。

しかも部下を思いやり、その部下だけじゃなく、他種族や他神話の人達からも信頼を得ている。

そんな人物が、この決断をしたのだ。

これじゃあ、相当やらかしてるみたいだな。

「……………OK。場所は分かかってんだろっうな？」

「おう。これがリストだ。……………だが、お前に行つて貰いたい場所がある」

「さんきゅ。……………ん？こう言うのもなんだが、俺が出る程なのか？」

知つてるとは思うが、俺はこの組織の中でトップに立つてる内の一人だ。

当然実力も無かつたら、その地位にはいない。

俺の実力だが、簡単に言えばアザゼルと同等以上だ。

普通に戦えば同等だが、俺がガチでやれば殺せば勝ちなので、隠密に特化した俺にその分、分配が上がる。

だからアザゼル以下の墮天使ごときに俺が出るのか謎なのだ。

上級だとしても幹部の側近が出れば片付くからな。

だから、そう言った意味も込めて、言ったのだがアザゼルが次に放った説明で俺は納得することになる。

「お前に言っただけで貰いたいのは、駒王町というところだ。あのグレモリー家の領地なのだ、問題が発生した」

「問題？」

「ああ。まあ、あそこは潜入するだけなら、あそこはガバガバだし、お前のところの下つ端でも数ヶ月は潜入出来るほどだ」

「……………そんなところに、俺を行かせるつもりか？」

「まあ待ってて。問題はこれからだ。その町に、今代の『赤龍帝』がいることが判明した」

「ツ!!……………なるほど、すまなかつたな」

『赤龍帝』。

かつて、三大勢力同士の戦争で大暴れしたという二天龍の片割れ、ドライグ・ゴツホを宿した神器……………ロンギヌス神滅具の所有者。

有する能力は「倍加」と「謙讓」。

「倍加」は10秒ごとに身体能力を倍にしていき、「謙讓」はその「倍加」した能力を他人に渡すことが出来る能力だ。

しかも「禁手」に至れば、その質は桁違いに上がる。

その能力故にどの勢力も喉から手が出るほど欲しがるほどだ。

だから、俺は驚いたのだ。

悪魔陣営に『赤龍帝』が加わったのかと……………。

そうとは知らずに……………俺は……………。

はあ、どうも悪魔の名前が出る度に少し機嫌が悪くなってしまう…。

だから、その意味も込めてアザゼルに謝る。

すると、アザゼルは軽く笑い、許してくれた。

「気にすんな。勿体振った俺がわりい」

「自覚あつたんかい！はあ、まあ良い。じゃあ明日早速始めるよ」

「それは助かる。んじゃあ、俺は帰るわ」

「おう、じゃあな」

さて、アザゼルも帰ったし、とつとと採点を終わらせましようかねえ。

次は俺の部下たちに知らせとくか。

く翌日の朝く

「全員集まったかな？それじゃあ、昨夜に突如としてアザゼルのことについて話そうと思う」

ここは『信念の方舟』の本拠地にある会議室だ。

それも幹部以上の者がごく一部の従者しか入れない場所だ。

そんな場所に、エルキドゥとその一部の部下以外が集まっていた。

会議室の中央にある楕円状の円卓の中央に、俺に右に項羽が座っている。

俺の左隣はエルキドゥの席なので一つ飛ばして順に、左側に

『教育部門』の長、 “猫？” 黒歌。

『風紀部門』の長、 “ファウストの末裔” ゲオルグ。

『財政部門』の長、 “吸血鬼” ヴアレリー。

『偵察部門』の長、 “怪物殺しの英雄” ペルセウス

そこから空いている『医療部門』と『探索部門』の席を二つ飛ばし、

『外交部門』の長、 “三代目孫悟空” 美猴。

『総務部門』の長、 “天才軍師” 諸葛亮。

『生産部門』の長、〃施しの英雄〃カルナ。

『軍事部門』の長、〃魔劍の担い手〃ジーク。

『技術部門』の長、〃不屈の英雄〃曹操。

『管理部門』の長、〃鮮血の美姫〃虞姫。

その隣に項羽で一周して、俺になる。

俺が立つて始まりを告げると、皆一斉に此方を向く。

そこで、今回集まって貰った事の顛末を話す。

とは言っても、「墮天使達の捕縛」と「俺が駒王町に行くこと」だけなんだけど…。

すると、ペルセウスが真っ先に手を上げた。

「何で兄貴が行く必要があるんだ？それなら、俺が行った方が良いだろう？」

ペルセウスの言ってることはもつともだ。

彼は俺に次いで、ここでは桁違いのスピードを持つてる。

しかし、今回は未知数にありふれてる。

だから、ペルセウスの言葉を軽く流してこれから話すことを伝えると、彼は大人しくなった。

そして次に、そのリストを掲げ、中央にある四方に画面が映るようになってるモニターが起動し、そこにリストが大きく映っている。

「そして、これがそのリストだ。エルキドウの方にも手伝って貰うが、君たちの部下から有志者を募って、各自行動を移してくれ。それで、本題だが……。君たちが気になってることだ」

俺がそう言うのと、空気がピリツとなる。

それもそうだ。

部下から情報を得るよりも先にボスが動くなど前代未聞だからな。

俺以外にやるとしたら、それこそ愚か者だろう。

「俺が行く予定の町……駒王町は、知つての通りかの『超越者』である魔王サーゼクス・ルシファアの妹、リアス・グレモリーが管理してる町だ。しかし、あそこの警備態勢はあるようで無いようなものだ。つまり、俺が行く必要は無い」

「理由が本当にそれだけならな」

俺の言葉に続くように言葉を発したのはジークだ。

俺はその言葉に頷き、皆のほうへとむき直す。

「そう。ジークの言うとおりだ。そこに俺が行かなければいけない理由があった。その理由とは、その町に……。今代の『赤龍帝』が確認された」

『!!』

その言葉に驚いて、「危険です!」、「それだったら私が行くにや!」、「貴方じゃ無くて

も良いのでは？」という声が聞こえてくる。

皆、俺を心配してくれてそう言ってるのはありがたいが、事態が事態だ。

だから俺は微笑みながら彼らに言う。

「心配してくれるのはありがたいが、もしもその『赤龍帝』が暴走してしまった場合、止められること事態は幹部の君たちも出来るだろうが、逃げ切れなかったら俺か項羽ぐらいいだ。しかし、項羽や技術部門には例の物の研究に集中して欲しい。なら、俺が出るしかないだろ？なに、死地に行くわけじゃ無いから、危険と判断したら即刻逃げるさ」

その言葉に渋々納得した幹部達。

そんな中、項羽が俺に向けて何かを渡す。

これは…？

「それは以前アザゼル達が緊急用に使っていた転移の効果がある神器だ。設定はここにしてあるから、万が一の時にでも使え。お前を失いたくは無い」

へえ、いつの間に研究してたのやら。

項羽の口調はあれだが、俺を思ってるのは間違いないので、俺はそれをありがたく受け取り、礼を言う。

項羽はにやつと笑い反応を示した。

その後は、軽くみんなからの報告を受けて会議を終了した。

では、早速始めましょうか。
夕方ぐらいには着くつしよ。



おつす、俺の名は兵藤一誠！

聞いて驚け！

なんと、俺は今日、彼女である天野夕麻ちゃんとデートをしていました。
彼女は昨日、俺に告白してきて、今日にデートする事になったんだ。

本当に楽しかった。

ああ、必死にデートプランを考えてきて良かったぜ！

あ、今の時刻は日が落ちかけてるから、六時ぐらいか？

いや！

今はそんな事よりも、夕麻ちゃんとお別れの時間になってしまった。

俺がそう名残惜しそうにしてると、夕麻ちゃんは俺に妖艶な笑みを浮かべ、俺に話し掛けてくる。

「ねえ、イツセイ君。最後に一つ良いかな？」

「ん？なんだい？」

夕麻ちゃんが最後に頼み事かな？

何だろ？

何か欲しいものでもあったのかな？

とか、そんな事を思ってるよ

「死んでくれないかな？」

突如、俺の思考が一瞬だけ停止した。

すぐに我に返ると、先程と同じように妖艶な笑みを浮かべている彼女がいる。

俺は聞き間違いだと信じたく、一度、彼女へ聞き返す。

「えつと……？今……なんて……？」

「だから、あなたには死んで欲しいの」

そういった彼女は、突如としてその姿を変えた。

先程とは違い、露出の多い、いや、大事などころ以外ほとんど出てる格好へと変わる。

だが、それよりも気になるのは、いきなり彼女の背中から生えた黒い鳥のような翼だろう。

いつもの俺なら興奮してただろうが、今の俺は本能が底から恐怖してる。

まるで、これからライオンに喰われるような哀れな鬼のように……。

すると、俺の直感が右に避けろというので、普段使わないような筋肉を駆使してまで必死に避ける。

その直感が当たったのか、次の瞬間、俺のいた場所を黒い何かが通り過ぎた。
あつぶねえ！

俺が避けられたことに安堵していると、夕麻ちゃんは舌打ちして、こちらをゴミでも見るかのような目つきで口を開く。

「チツ。下等種族のくせに、避けるなんて生意気ね…。まあ良いわ、すぐに終わらせてやるわ」

そう言つて、彼女は先程と同じような黒い何かを右手に収束させていた。

まづい！

俺は今、さつきに全力を使つてしまったから、真面に動けない……。

そして、彼女はさつきとは違う妖艶な笑みを浮かべ、俺に向けて放とうとした瞬間

「ッ!?!」

彼女の腕にナイフが刺さった。

そのせいで黒い何かは消失した。

俺も彼女も状況が分からずに混乱してる中、一人の男の声が聞こえてくる。

「よう、そここのビッチ駄鳥。油断は禁物だつて習わなかつたか?」

彼女の横に存在した路地から一人の男が現れた。

雪のような純白の髪にアイスブルーの瞳を持ち、顔の所々に縫い目のような物があ

る。

身長は俺より頭一つ分デカく、頭以外を黒で統一した服を纏っている。

突然現れた男に夕麻ちゃんは、その男に叫ぶ。

「下等種族の人間如きが……よくも私に傷をつけたな！後悔しながら死ねえ！」

そう言うのと、黒い何かは一瞬で収束し、男に向けられる。

だが、それは男の目の前まで到達すると、突如として消えた。

「!!？」

え？

嘘だろ？

あいつ、本当に人間か……？

俺がそう思っていると、男は夕麻ちゃんに向かって口を開く。

「無駄な抵抗は止めとけよ、墮天使。あいつから捕縛するよう頼まれてんだ。……つ

たく、部下に本当甘いよな、あいつは……」

最後に何か言ったが、俺にはよく聞こえなかったが、どうやら彼は彼女を捕まえるためにここにきたらしい。

だが、彼女はその言葉を理解したが、相手が気にくわれないようで、一瞬で相手の所に移動し、小さな拳を彼に向けて放つ。

しかし、次の瞬間、彼の姿が掻き消えた、と思っただけで現れた。
彼女の後ろに。

男の手には先程までは持ってなかった二振りの歪なナイフが有り、男はそれを腰にし
まうと同時に、拳を振り上げた状態で止まっていた夕麻ちゃんがドサリと倒れた。
よく見ると、彼女の姿に傷らしき物はなく、白目のまま、地面に伏せていた。

男は彼女が気絶したのを確認した後、どこからか取り出した鎖で彼女を縛った。
そして、彼女の身柄は拘束された。

「いったい、何が………?」

俺がそう思っていると、彼は周辺を見回し、安全を確認した後、こちらを見ると、すぐ
にこちらへ向かってきた。

そして、彼は少申し訳なさそうにしながら俺に話し掛けてきた。

「初めまして。俺はラッセル。君も災難だったね。暴走してる墮天使に狙われるなん
て……」

「はっ！」

「そうだ！」

「墮天使って、いったい……」

「んー、君が疑問に思っていることは分かるが、その前に君には選択肢がある」

「選択肢………?」

「そうだ。」

一つは、俺の元に来る。俺……いや、俺の所属してる組織は君みたいな神セイクリッド・ギア器を所有してる人を保護するところなんだ。君が望むなら俺たちは歓迎しよう。

二つ目、今起こった一部始終を記憶から抹消し、平穏な日常を過ごす。一番のオススメはこれかな。君は茨の道に足を突っ込まなくて済むからね。君が無力な代わり、と言つてはなんだが、密かに護衛を付けさせて貰おう。こちら側の人達は君みたいな神器持ちを貪欲に欲する奴らが多いからね。そんな奴らから君を守るために護衛を置かせて貰う。

三つ目、これは、後ろにいる奴から話して貰おうか。

いるんだろう?

リアス・グレモリーよ」

「!?!」

その名は、俺が通つてる駒王学園に存在する二大お姉さまの一人だ。

『オカルト研究部』という入部条件が謎の部活に入ってる人だ。

だから、俺は驚いた。

彼が視線を向けた先、俺の真後ろに立っていた、真紅の髪を持つ美人。

我らがリアス・グレモリー先輩が立っていた。

ただ、その顔は警戒を表しており、ラッセルさんを睨みながらやつと口を開く。

「あなたは……………何者なのかしら？」

「なんでもかんでも聞けば返ってくると思うなよ、小娘。時には、相手を観察して、その正体を心の内で留めておく必要があるからな。……………まあ、一つだけ言うなら、君らとは敵かな？」

ラッセルさんがそう言った瞬間、身の毛もよだつ何かが俺を襲う。

これは……………殺気……………!?

「なら、ここで潰しても構わないわよね？」

「おお、恐い怖い。だが、傲るなよ、リアス・グレモリー。お前如きが俺の相手が務まると思うなよ。まあ、ここでもしても良いが、その前に、彼の答えを聞こうでは無いか？最後の選択肢は彼女の『眷属』となり、悪魔に転生することだ。俺は君の意志を尊重しよう」

彼はそう言って、俺の方に視線を向けた。

先輩もそれに連られて、俺に視線を向ける。

俺の答えは決まっている。

「俺は先輩に付いてきます」

俺は覚悟を決め、ラッセルさんに向き合う。

先輩は驚いてるが、ラッセルさんは笑みを浮かべたままだ。

そして、彼は俺に口を開く。

「そうか。なら、俺はおさらばしようかね」

「させるとでも？」

「無駄だから止めとけ。じゃあ、さらばだ、少年。君が死なないことを祈るよ」

ラッセルさんはそう言うと、彼の周りに霧が発生し、先輩が何らかの力で霧を晴らす
が、その時には彼の姿は見えなくなっていた。

ラッセルさんはいったい、何者だったんだろうか……？

哀れな墮天使

「どうやら、『赤龍帝』は白だったな。

これから悪魔になるんだけども…。」

「はあ、俺が心配して駆け付けた意味が無いじゃないか……。」

「それにしても、俺よりグレモリーを選んだ時のあの目、何かを覚悟してたな。」

「それと僅かに見えた煩惱のオーラ。」

「あいつ、まさか乳房で選んだと言わないよな？」

「え？」

「言わないよな（必死）!？」

「いや、今はそんな事よりも……。」

「おいおい、なんでお前がいんだ？本部待機のはずだろ？」

「我らがボスを一人で行かせるはずありませんよ？それに、演出としては良かったで

しよう？」

「確かにそうだが……。」

とあるビルの屋上、俺は何故かこの町にいるゲオルクを問い詰めていた。

しかし、彼は飄々とした顔で、俺を一人にさせるわけには行かない、と言った。
 ゲオルクは神セイクリッド・ギア器の中でも特に強力な神滅具ロンギヌスの所有者で、その名も絶ディメンション・ロスト霧霧。
 結界系最強の神器で、無限に霧を出し、その中に閉じ込めた相手を攪乱させたり、その霧に触れた者を任意の場所に転移させる事が出来る。

使い方次第では一国をも滅ぼす能力で、かなりのチートである。

だから、彼には防衛時の要となつてもらつてるのだが、何故ここにいるだろうか？

「俺がここ来た理由は、ぶつちやけあなたの護衛任務のついでです」

「ついで？ 他にも理由が？」

「はい。今あなたが脇に抱えている墮天使を本部に「神グの子リを見張る者ゴ」本部に届ける
 よう言われました、それならば、その類が得意な俺があなたの元に行こうと言うことになり
 ました」

「そう言うことか。まあ、俺もこいつをどこに置こうか迷つてたし、良いか。んじや
 あ、よろしく」

「お任せを」

俺はそう言つて、墮天使を床に置き、それを彼は霧で包んだ。

霧が晴れた頃には彼女の姿は無かった。

本当に、ゲオルクの神滅具は便利だな。

彼、ゲオルクとの出会いは曹操と出会って数ヶ月後ぐら이었다。

あれは、俺がオーディン様から呼び出しを受けた時、途中で寄った小さな町に、ゲオルクはいた。

ゲオルクはスラムの孤児だった。

子供ということ、必死に働いて他の孤児達の面倒を見ようにも、いくら働いても小さな稼ぎにしかならず、それでは自分より年下の孤児達を賄えないことを悟る。

しかし、ある日に神器が覚醒し、ゲオルクはその能力をすぐに把握した後に、盗みを働いた。

人から財布を、店から日用品や食物を。

そんなある日、彼はとうとう捕まってしまい、今までの被害者達に半殺しの状態でゴミ捨て場に放置されていた。

そんな時に、俺がそこを通りかかった。

僅かながらに意識があることに気付き、俺は彼に、「何を望む？」と聞いた。

もしかしたら、何らかの罰でこうしてるのかもしれない、けれど、この問いの返答次第でこの町の状況を理解できると思い、そう問いた。

すると、擦れながらも小さな声で、「僕………より………こど………も………たち………を」と言った。

俺はその言葉で理解し、彼を背負いながら人目の付かない場所に彼を隠し、スラムの方へと向かった。

俺がそこに辿り着いた時、少数の子供達をその倍以上の人数でたこ殴りにしてる大人達がいいた。

それを見てブチ切れた俺は命を取るまではいかないが、大人達全てを地に伏させた。

子供達の数は8人。

俺は町の奴らにバレないように、ゲオルクの元まで子供達を連れ、俺に付着してるGPSを頼りに項羽を呼び出し、拠点へと連れてつてもらった。

それから、彼は俺に懐き、数が少なかった頃とはいえ、部下を招集する際、誰よりも真っ先に来るのはこいつだった。

もう、今となつては俺の右腕のような存在になつてる。

「それで、これからどうしますか？」

ふと、ゲオルクにその声を掛けられる。

あー、これからか……。

当然、する事は決まつてる。

「リストにはまだ、この町に彼女の部下が三人程潜伏してる。恐らく、潜伏先は無尽の教会だ。今日中に捕まえて、帰るぞ」

「分かりました」

ゲオルクは、霧を発動し、俺たちの姿はそこから消えるのだった。

◆◆

俺の名は兵藤一誠。

昨日までは普通の高校生だった俺だが、今は悪魔になったぜ。

え？

意味が分からない？

俺も言われたら分からないと思うから安心しろ。

そんな俺だが、今はオカルト研究部の部室にいる。

なんでも、昨日のことについて、部長であるリアス先輩が俺に聞きたいそうだ。

とは言っても……………

「とは言っても、俺も詳しいことは分からないですよ？突然現れたあの男も、俺も初めて見ましたし……………」

「ん〜…………。やっぱり、何も知らないのよね…………。じゃあ、彼はいったい何者なのかしら……………」

俺がそう答えると、部長は再び悩み始めた。

さつきからずつとこの調子だ。

部長の力にはなりたいが、俺は何も知らないしな……

「その彼の特徴で分かるものはないのかい？」

不意にそんな声が聞こえる。

俺は声の主の方へ見やると、そこにいたのは学園の王子様である木場裕斗が、そう提案してた。

んー、特徴か。

「特徴つってもな。名前はラッセルで、身長は俺より頭一つ分でかく、全身黒い服に、白髪、顔にはいくつか縫い目のような傷があつて、腰には何本かナイフを差してた………つて、思ったよりもあるな……」

「かなり充分だと思うけどな。もし、〃はぐれ悪魔〃だったら、サーゼクス様に聞けば分かるかもしれないよ？」

その手があつた！

サーゼクス様というのは、部長のお兄さんで、俺が通つてるこの学園の理事長でもあり、悪魔達が住む魔界を統べる四人の魔王、四大魔王の一人だ。

しかも、歴代でも三人しかいないという〃超越者〃という凄い人なのとか。

つい先ほど、それを告げられ、理解できずに一瞬フリーズしてしまったのは、仕方ないだろ。

俺はまだ会ったことはないが、その人ならば何か知ってるかもしれない！

しかし、部長は何故か渋っていた。

「大丈夫かしら…。邪魔じゃ無ければ良いのだけど……」

「それでしたら大丈夫だと思いますわ。部長の声でしたら嬉々として返してくれるはず
ですわ」

「そうかしら…?」

「そうですわ」

「……少し待っててちょうだい」

「分かりましたわ」

部長はそう呟くと、部長はどこかへ去っていった。

そんな部長を説得したのは、オカルト研究部の副部長で、部長と並ぶ、学園の二大お
姉さまの一人である姫島朱乃先輩だ。

ちなみに巨乳である。

部長に負けじと劣らずなおっぱいである。

そんなものの眼福に決まっている……!」

そんな時、ふと、近くから可愛らしい声が聞こえる。

「……………先輩がまたやらしい妄想してます」

そう眩いたのは、学園のマスコットである塔城子猫ちゃん。

一つ下ながらもかなり毒舌で、猫耳を被せたら絶対に似合うであろう姿である。

しかし、何故俺の思考が分かった!?

「……………顔に出ています」

そんな嫌なものを見るような目で言われた。

子猫ちゃん、いくら俺でも君からそんな事言われたら落ち込むよ？

俺がそう心の中で落ち込んでいると、部長が戻ってきた。

「ダメだったわ……。お兄様でも、知らなかったわ……」

少し落ち込んだ様子で、戻ってきた。

しかし、と部長は付け加える。

「お兄様は堕天使勢力に与する『神器使い』じゃないかと言ってたわ。恐らく、イツ

セーを狙った部下の後始末だろう、と」

「聞いたことがありますわね。あそこには神器使い専門の部隊があるとか」

堕天使、三大勢力の一角で、特徴なのは黒い鳥のような翼が背中から生えてることら

しく、恐らく一番人間に近く、魔力とその翼を隠したら見分けが付かないそうさ。

実際に昨日あったので、覚えておくように、テストに出るぞー。

「部長、それはつまり、イツセー君を狙ったのは部下の暴走……と言うことですか？」

祐斗が訝しむように部長に聞く。

部長はそれに頷き、部室には変な空気が流れる。

しかし、そんな空気を部長がすぐに壊す。

「こうなったら、少しでも墮天使に借りを作らすためにも動いた方がいいかしら？」
あ、部長の目が少し混乱してる。

やっぱり、部長でもこの状況を理解するのは難しいらしい。

俺は他の勢力やそのトップを知らないから難しいことは考えられないから、ここで静かに沈んでる人達の空気に入れないのが少し悔しい。

俺はその旨を伝えると、今夜に早速動くらしい。

俺は見学だとき。

部長達は、いったいどんな闘い方をするのだろうか？



夜8時頃。

俺とゲオルクは廃教会の扉の前に立っていた。

いくら場所が分かってても人払いと転移防止の結界を発動させるのに時間が掛かってしまい、今となっている。

はあ、早く帰りたかったのに……………。

こうなったら八つ当たりでもして帰ろう。

そんな事を思いながら、扉を蹴破ると、早速ながら光の魔力弾が飛んできた。

悪魔特效を持つこの光は悪魔が喰らえば大ダメージだが、人間である俺には悪魔よりダメージは喰らわれないし、対策として、自分より弱い魔力を無効化するアーティファクトがあるから無駄なことだ。

ちなみにこれはレイナーレが俺に撃ってきたやつが無効化したものである。

魔力弾が飛んできて弾けたと同時に、左右から拳と蹴りが飛んでくる。

俺はそれをバックステップで躲す。

扉の入り口付近に現れたのは、男女二人の墮天使達。

一人は紳士服を来た男で、もう片方は前に捕まえたレイナーレと似たような格好をしている女だった。

攻撃を躲されたのが気に食わなかったのか、男の方が俺を睨みながら舌打ちをする。

「ちっ。気味が悪い魔力が来たと思えば、人間とはな……。俺たちも舐められた物だな」

「そうね。レイナーレ様から未だに連絡無しだし、こいつらで遊びましょうか」

俺たちを見て、そう呟く二人。

舐めてるのはどっちだってんだ。

アザゼルに一撃も与えられない奴らが何を言ってるのやら……。

俺が心の中で、そう呟くと、男の方がこちらとの距離を一瞬で詰めてきた。

そこから拳が放たれるが、ただの力任せの攻撃なので俺はそれを片手で衝撃を殺しながら後ろに流す。

これがダメなら、と蹴りも混ぜたインファイトをし始めるが、これは両手でいなす。

そんな中、チラツと隣を見ると、ゲオルクにも女の方が突っ込んだ。

しかし、ゲオルクは神器を使わないで魔術で相手をしてるみたいだ。

それもそうか、こんな奴らに神器を使うまでもないよな！

「せあっ！」

「く……はっ……！」

俺はインファイトを続ける男墮天使が蹴りを放ったタイミングで、それを一瞬でしゃがんで躲し、男墮天使の空いてるもう片方の足に蹴りを入れバランスを崩させる。

俺はその隙を狙い、前方に倒れてくる男墮天使のみぞおちに拳を入れる。

男墮天使は刺りの痛さに耐えられなかったのか、意識を失い、ぐったりとする。

俺はそれを肩に抱え、ゲオルクの方を見る。

すると、女墮天使が増えていた。

あー、さっき俺に魔法撃ってきたやつかな？

二対一で、本来ならゲオルクが苦戦するはずだが、ゲオルクは涼しい顔で、二人は焦りと怒りの混じった顔をしていた。

あ、ゲオルクの炎弾が二人に直撃して、二人がダウンした。

ゲオルクはその二人を縄で縛り、俺も男墮天使を降ろして縄で縛り、ゲオルクの霧で『神の子を見張る者』本部へ送り届けた。

さて、俺たちも帰ろうとゲオルクの霧を出すよう指示を出そうとしたとき、俺の首元に一閃。

ガキイン！

しかし、それは当たる直前で見えない壁に阻まれた。

間違いなくゲオルクの張った障壁だ。

全く、過保護なんだよ。

あれぐらい、俺一人でも止めれたっつーの。

いや、今はんな事よりも、俺を襲った奴か…。

障壁の向こう側、そちらに視線を向けると金髪の美男子が魔剣らしき物を構え、こちらを見ていた。

遅れて、その後ろから複数の影が現れる。

赤髪と白髪と黒髪の美少女、茶髪の冴えない顔の少年。

なんですかねえ？

このラノベ典型の主人公サイドにいそうな人達は…。

って、彼は「赤龍帝」じゃん。

俺がそう思っていると、ゲオルクの怒気の孕んだ声が金髪の少年に向けられる。

「おいお前……………。言葉も無しに、この方に刃を向けるとは……………。良い度胸をしてるな、糞ガキが！」

「まあまあ、落ち着けて。お前の魔力で彼どころか後ろにいる子達も警戒心丸出しじゃないか」

「しかし……………」

「落ち着け、な？」

「はい……………」

俺は憤るゲオルクを宥め、再び、目の前の集団を見やる。

やはり、赤髪の女はリアス・グレモリーか…。

「よう、小娘。言葉も無しに己の眷属を俺に攻撃するとはどういう見だ？」

「そうでもしなかったら、転移しようとしていたでしょう？それで、用件は分かっているわよね？」

おお、こえーこえー。

つて、こらこらゲオルク、落ち着きなつて。

相手は俺たちのことを知らねえんだから。

あ、教えんなよ？

一応、隠せる情報は隠したいからな。

俺はリアス・グレモリーの問いに答える。

「それは、この教会にいた堕天使のことか？ それなら、俺らの手で本部に届けたぞ。元々俺らはそいつらを捕まえるためにここまで来たんだからな。俺らの任務は終了した。それで、もう帰って良いか？」

「だとしてもよ。私の領地に無断で侵入したのだから、話ぐらいは良くないかしら？」
んー、簡単に返してはくれないようだ。

こちらとしては、万が一にも援軍や情報が拡散しない内に帰りたい。

何故つて、俺らの組織は悪魔陣営と仲が悪いからな。

悪いと言つても、こちらが一方的に嫌がらせをしてるだけだな。

最近の俺らの目的は、はぐれ悪魔を生み出す要因となつてる「イヴァイル・ピース悪魔の駒」の製造を

中止させる事だ。

アレのせいで、力を得たと勘違いして無力な人達が犠牲となつてるのだ。

それで、それを「はぐれ」にして、更に力を得ようとする「はぐれ」のせいで被害が

増える。

実際に、俺らは製造工場を壊滅させたことがある。

だが、できたのはその一回だけで、良くて半壊、最悪撃退される。

そんな事もあり、悪魔陣営の所には顔バレしたくない。

なら、顔を隠せば良いじゃんと言うだろうが、フードや仮面で姿を隠して悪魔達の前で行動したことがあるので、そうした事をすれば、すぐに俺の名前がバレてしまう。

だから、アザゼルの部下を装ったのだ。

アザゼルには保護した神器使用による部隊が存在する。

その最たる例が、「黒狗」だ。

まあ、あいつらのことは、別の機会でもいいか。

そんな事より、今、俺は舐められてる。

どうせ、あの女は俺が神器使いの人間としか思っていないだろう。

なら、その隙を突いて、全員の意識を刈り取ってとんずらするか。

うん、そうしよう。

「ゲオルク、いつもの」

「了解」

『??:?』

その場にいたグレモリー陣営は、俺たちが何を言ってるのか分からない様子だった。だが、それは次の瞬間に分かる。

俺らの姿が……掻き消え、すぐに現れる。

グレモリー陣営の誰よりも後ろの位置に。

俺らが現れた直後、「赤龍帝」以外の奴らの意識は失った。

その「赤龍帝」君は、何が起こったのか分からない様子だったが、戦慄した目でこちらを見ていた。

俺は警戒する「赤龍帝」に近づき、告げる。

「安心しろ「赤龍帝」。ただ単純に意識を刈り取っただけだ。その内に目覚めるだろう。だが、これだけは覚えとけ。俺たちに牙を剥くなら容赦はしないからな」

俺はそう告げて、ゲオルクと共にその場から姿を消すのであった。

とある英雄達と小さな少年と心優しいシスターの一時

とある静寂が支配する森の中、一人の少女が木の枝の上に座って空に無限に広がる星空を眺めていた。

そんな時、ふと右ポケットに入れていたスマホからの着信音が鳴る。

「ん？電話？……もしもし、ジャック、どうしたの？……分かったよ。近くにそれっぽい気配があるから、ついでにやっておくよ。……フフ、そんなことで礼を言うなんて、君も老けてきたのかい？……冗談だよ、それじゃあ、またね」

相手は彼女にとって、誰よりも愛してやまない大切な人からだった。

その愛しの人々が告げた内容は、最近になって墮天使達が暴走して神器狩りや人外狩りを行ってるから、もしいたら捕まえ欲しいとのことだった。

最近となって運動もしていない彼女は、それを承諾。

そんなことがなくても、彼の言うことなら大抵は聞いてしまう甘い彼女である。

彼女の名はエルキドゥ。

『信念の方舟』に所属する、他勢力から「スリーピラー・レグルス」と呼ばれるボスの内の一人だ。

※ジャックはあまりこの呼び名が苦手で自分から名乗ろうとしない。

名前から察せる通りボスは三人おり、全員が各神話勢力の上位神に匹敵するほどの実力者だ。

ここで驚きなのが、その全員が神滅具ロンギヌスの使い手で、自力で人間を超越した、他勢力から「あいつらはバグよりも酷い存在だ」と言われるほどの強さを持っている。

ちなみに、彼女はその三人の内の強さで言えば「二番目」である。

一番の者は、もはや各勢力の主神クラスに匹敵するほどなので、他二人からよく「お前本当に同じ人間か？」と聞かれている。

三番目は真つ正面から戦えば各勢力の幹部クラスだが、本来は暗殺や諜報と言った裏仕事の方が得意なので、搦め手や罠と言った何でもありの勝負なら彼は神すらも倒せる。

いや、神滅具を使えば主神も倒せるが、彼自身にとってもそれは諸刃の剣なので使うことは滅多に無い。

……………まあ、その三番目と二番目のエルキドゥは夫婦の関係で、かなり仲が良い。

一番目はハブられたと思ってしまうかもしれないが、一番目も結婚してる。

こちらはまだ初々しいところがあり、まだキス止まりだ。

いや、二年間いてキスも数回しかできてないのはどうなのだろうか？

……………今はこの話題を止めておこう。

彼の名誉のためにも……………。

閑話休題。

エルキドゥは連絡を受けた後、溢れる喜びのオーラが抑えきれないのか、満面のニコニコ顔で拠点に戻る。

そこは森の中にある小さな洞窟で、中には数人の男女が薪に火を付けて囲っていた。その内の一人がエルキドゥに気づき、彼女に手を振る。

「あ、エルキドゥさあん！どこ行つてたんですかあ？」

手を振つたのは金髪の女の子らしい可愛い顔をしていながら、紳士服を来た少年……………俗に言う「男の娘」と言う奴だ。

彼の名はギヤスパー・ヴラデイ、『探索部門』の長だ。

彼と『信念の方舟』の出会い、吸血鬼連中との戦争の途中だった。

自己中心的な考え方が激しく、民間人にも被害が出ていたのでそれに耐えられなかった
“三柱の王”指揮の下、戦争を開始した。

そして、その途中で彼女が二人の子供の吸血鬼を見つけた。

しかも、デイウォーカーと呼ばれる日中を歩いても大丈夫な吸血鬼で、人間とのハーフでもあった。

それが、このギヤスパーと後の『財政部門』の長であるヴァレリーだった。

エルキドゥは二人が神器所有者だと気づき、あんな吸血鬼達と共にいれば明るい未来が無いのを一瞬で悟った。

だから、二人を保護し、他にも同じ境遇の子供がいなかを探したが、保護できたのは二人だけだった。

結果で言えば、吸血鬼達との戦争は『信念の方舟』が勝利した。

戦争途中、トップの意志に賛同できなかった吸血鬼達アーヴァレリーやギヤスパアの親類もいたアーが付いたりしたおかげでかなり楽になったが、逃げ出した吸血鬼もいたので、今も搜索は続けられている。

そこから、二人は優秀に育つていき、二人とも各部門の長という、『信念の方舟』の幹部になることが出来たのだ。

ちなみに、彼は16歳という、各部門の中でも最年少の長だが、実力・知識両方とも、どの長達にも引けを取らない。

まあ、彼をそうしたのは………ここは彼の名誉のためにも黙っておこう。彼も必死に努力して、長に認めて貰った実力者ということを皆に理解して欲しい。

「全くだ。近くでこいつらが、今か今かとお前を心配してる姿は流石に鬱陶しかったぞ。あまり後輩を心配させてやるな」

エルキドゥに注意する若い男の声。

その主の名はアスクレピオス。

とはいっても本人ではなく、“アスクレピオス”の末裔だ。

彼は神器『蛇纏オフユールカス・クラレワンドし医神の魔杖』の所有者だ。

効果は杖に巻き付いてる蛇の操作と四肢欠損までの傷を一瞬で治癒できる。

彼は元々スラムの出だが、その能力を教会に買われ、その後洗脳を受け、道具同然のような人生を送ってきた。

しかし、項羽がその教会のトップの不正を暴き、その教会所属の者達を全員捕まえた後に彼を発見したのがエルキドウド。

当時、彼には洗脳魔術がかかっており、項羽がその洗脳を解いたは良いものの、何があつたのか『蘇生薬エリクサー』の制作が人生の目標となってしまう。

未だその結果は出ていないが、その過程で生まれた様々な薬品や治癒系魔法陣などの功績が認められ、『医療部門』の長になった男だ。

「……………（ソワソワ）」

洞窟の端っこで、エルキドウドを見ながら無言でソワソワしてる小学生低学年並みの少年がいた。

少年の名はレオナルド。

彼もエルキドウドを心配してた一人だ。

この場にいる人達は全員が一般人じゃないのはおわかり戴けるだろう。ならこの少年もその一人だ。

彼は、幼くして神滅具『アナハイレイション・メーカー魔獣創造』を目覚めさせた神器所有者なのである。

しかも四つある内の上位神滅具の内の一つでもある。

彼は今回二番目に拾われた者で、元々この洞窟に引き籠もっていたのだ。

しかもただ引き籠もるだけじゃ無く、『魔獣創造』の力で様々な魔獣を作り出して、それを護りとしていた。

そのために、それを不審に思った者が『信念の方舟』に依頼を出して、エルキドウ達が出ることになったのだ。

ちなみに、レオナルドが創造した魔獣はエルキドウの『エルキドウ天の鎖』と『エンジ・オブ・パピロン民の叡智』による超物量戦で一瞬にして殲滅された。

もうギヤスパアの神器である『フォレドワン・パロール・ピユール停止世界の邪眼』の能力である時間の停止をするまでも無かったので、ギヤスパアが密かに「いる意味あるのかな」と思ってしまったのは秘密だ。

本来ならば、自分の魔獣達を瞬く間に殲滅したエルキドウに恐怖を覚えるはずなのに、レオナルドが覚えたのは尊敬なのは……………どうなのだろうか？

恐らく、自分と似たような物量戦を得意とすると思っただろう。

だが、ぶっちゃけて言えば、レオナルドの方がかなり凶悪である。

エルキドウの『民の叡智』は全て土製で、耐久値で言えばそこまでない。

代わりに『天の鎖』ならば、耐久値はあるものの『民の叡智』のように変幻自在に姿形を変えられるわけではない。

エルキドウはこれを上手いバランスで戦術を組み立てるために成り立っているのだが、レオナルドの神滅具はその上を行く。

今はまだ成長段階だが、彼を鍛えることによつて無限とも言える数の魔獣を作り出せ、それぞれ特色が違う魔獣も作り出すことも可能なのだ。

上位神滅具とは全てこのように理不尽なまでに強いのだ。

レオナルドの含めて上位神滅具は四つあり、他の上位神滅具の内、『ダイヤモンド・ロスト絶霧』と『トウルー・ロンギヌス黄昏の聖槍』は既に『信念の方舟』に所属しているゲオルクと曹操が所持している。

残りの一つは『ゼニス・テンバスト煌天雷獄』と言い、天候を操れる能力である。

天界が保護したデュリオ・ジェズアルドが所持している。

『ゼニス・テンバスト煌天雷獄』は神滅具の中でも二番目の強さで、一番は『トウルー・ロンギヌス黄昏の聖槍』である。

まあ、簡単に言ってしまうえば『信念の方舟』は千にも満たず数で他神話勢力に匹敵するのである。

そんな勢力をそのままにしておく勢力が無いはずが無く、実際に須弥山や北歐以外

から攻撃を受けており、その最初が墮天使である。

今も一部の勢力から攻撃を受けてるが、その敵対してる中にはテロ組織も有り、これまた面倒くさい奴らばかりだが、今はこの話はやめておこう。

要はレオナルドの神滅具は存在自体がヤバくて、そのヤバいのが更に他勢力からヤバい奴しかいないと言われるヤバい組織に入ったということだ。

結論、ヤバいことになった（語彙力放棄）。

「あの……大丈夫でしたか……？」

おずおずとそう声を掛けたのは金髪の美少女。

名をアーシア・アルジエント。

彼女は神器『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』を見に宿している。

元々は教会に所属しており、ある日に傷だらけの悪魔を神器で癒したことにより教会から魔女認定され、教会から追い出されたのである。

そこを、今回遠征に来ていたエルキドウ達に拾われた。

いや……彼女が意味も無く彷徨っていたところをアスクレピオスが発見し、拉致してきたのである。

それを理解したエルキドウはアスクレピオスに説教を喰らわしたが、彼女が追放された身だと知り、保護する事にしたのだ。

「ごめんごめん。実はさつきまで星空眺めてただけど、途中であの人から電話があつてね。ちよつとした話と、ついでに依頼が来たよ」

その言葉を聞いて少しは真剣になるが、空気は柔らかい。

それもそうだ。

まだ幼いレオナルドや精神的に弱いアーシアもいる状態で、空気を変えてしまつたらそれこそ不安で心がいっぱいになってしまうだろう。

なので、空気を変えないようアスクレピオスが問う。

「ほう。その内容は？」

「……………暴走してる堕天使の捕縛又は処分だつてさ」

『!』

その言葉の意味を理解し、驚くギヤスパーとアスクレピオス。

彼らはアザゼルの性格を知っているために、エルキドウの夫で有り、ボスの一人でもあるジャックが、仲の良い彼の部下に勝手にそんな事をするはずが無いのは既に分かり切っている。

なら、誰の指示か。

それは他ならぬ堕天使の総督であるアザゼルしかいないだろう。

アザゼルの元部下が神器狩りで他勢力に迷惑をかけてるのだと悟り、それでアザゼル

が思いきったことに二人は驚いたのだ。

アザゼルにそこまでやらせる部下の命運は……………ご愁傷様です。

だが、今は夜なので、行動は明日からすることになった。

それで今夜の過ごし方を知らないであろうアーシアとレオナルドにエルキドゥが説明する。

「ここには四人の神器使いがいるからね。神器から漏れ出る波動は尋常じゃないので、奮発しようと思います」

「……………おい、何か嫌な予感しかしないんだが？」

アスクレピオスが何故か焦る中、エルキドゥは無言で荷物入れの中を漁る。

レオナルドとアーシアはよく分かかっていない様子。

「無言で荷物を漁るな！」

「お、あつたあつた♪」

「……………僕たち大丈夫ですかねえ？」

「……………『蘇生薬』創りたかったな……………」

「アスさん!？」

「アスさん」とは、彼と仲が良い者達から渾名である。

何故彼らが焦ってるのかというと、エルキドゥが取りだした物が原因だった。

彼女が取りだしたのは

人口神器『イミテーション・アヴァロン・プロトタイプ模造された理想郷』。

その効果は並の神器よりも強い。

それも理由の一つで、アスクレピオスとギヤスパーは焦る。

「解放するなよ?というか、何故それがある?」

「え?今回の旅に行く直前にジャックがくれたよ?」

(あの人かあああああああああああ!!?)

やらかしたのはジャックの方だった。

しかも、渡された本人はあまりよく分かっていないどころか、ただの凄い防衛システム的な神器としか考えていない。

ここに来てエルキドウの天然が発動してしまい、二人は心の中で頭を抱える。

しかし、それが並の神器より強いだけじゃ二人はこんなに焦らない。

まだやらかしたな程度で済むのだが、持ってきた物自体に問題があった。

実はアレ………項羽の最高傑作の一つなのだ。

出来たのは一年前だが、その効果がハッキリ言って異常なのである。

まず、指定空間の存在隠蔽。

これは指定した空間の存在を世界から隠す。

これの恐ろしいところは存在理由を隠すことによって、気配察知や魔力探知どころか生命力感知でも中にいる者を見つけないことは不可能なのだ。

二つ目は空間内にいる者の体力・魔力の自動回復促進と状態異常の無効化。

説明しなくても分かるだろうが、簡単に言えばそこにいる限り体力と魔力はどんどん回復していき、呪いや毒と言った有害な物質を無効化するので、殆ど無敵である。

例え、即死攻撃を食らってもすぐに最低限は生きてるので、その間に回復すれば生き返るので半不死状態になる。

そして、後数回使用できる。

ハッキリ言ってチートである。

ちなみ、これの制作にはアザゼルも関わっており、項羽とアザゼルがこれを出来たときには思わず二人してハイタッチをかました程である。

……………どうしてそんな代物を今回の遠征のためだけにエルキドウに渡したジャックの過保護ぶりに、項羽に怒られるんだろうな、と思う二人だった。

しかも、その後逆にジャックが項羽に向かって

「お前だつて相手が虞姫さんだったら同じことするだろうが！」

という発言で項羽が撃沈する未来も見えてる。

そんな事を考えてる内にエルキドウが人口神器を発動し、その直後に辺りがエメラル

ド色に輝いたかと思うとすぐに消えた。

神器が無事に発動した証である。

もうこの時の幹部の二人の心中は、もうどうにでもなれ、と達観していた。

ちなみに、何故洞窟で夜を過ごそうとしてるのかというと、レオナルドの頼みのためだ。

実は彼と和解したのはほんの数時間前だ。

その時には既に夕刻だったのと、エルキドウが偶には自然で夜を過ごしたいと言ったせいだ。

これにはギヤスパーもアーシアも問題は無かったのだが、意外なことに医療に関して面倒くさい性格をしているアスクレピオスが賛成したのは意外だった。

理由は、もしかしたら自分の知らない症状が出るかもしれないという、何ともある意味探究心の強いものだった。

まあ、そんなこんなもありながら彼女達はその日の夜は無事に過ごした。

（翌日）

神器の効果を止めて洞窟から出た一行は、本来の任務である神器使い探しとジャック

の頼みの暴走墮天使の搜索を開始した。

一週間後、未覚醒・覚醒済みの神器使い10人が『信念の方舟』へ、墮天使の数は数十人が『神の子を見張る者』へと送られた。

ちなみに、帰ったエルキドゥはジャックを捕まえてどこかへ消えたらしい。

オアツイコトデ……。

アザゼルの方はもう栄養ドリンク片手に常備し、部下も同じ状態という地獄絵図になっていた。

それを知ったジャックが『神の子を見張る者』本部にアスクレピオスを送るまであと数日。

聖劍計画・前編

「ジャックウウウウウウウ!! 待てええええええ!!!」

「ぎゃあああああああ! 死ぬううううう!」

『ベリッツ・ノア 信念の方舟』の本部にてジャックが項羽に追い掛けられるという珍らしい事態が起こっていた。

組織に三人しかいないトップが同じトップに追い掛けられてる状況に、それを見掛けた下っ端達は、ジャック様がまたやらかしたのか、と生暖かさと呆れた目で見ていた。

こうなつた原因は、項羽の最高傑作の一つをジャックが断りなく勝手に使ったからである。

使つたのはエルキドウだが、ジャックが彼女に渡しさえしなければ使わないのは分かつてるため、彼女は無実となつた。

その代わり、その罪もジャックに行くことになるため、ジャックは必死に逃げてるのだ。

「てめえだつて虞姫さんだつたら渡すだろうが!」

「うっ!? ……確かにそうだが、今回は別だ! 俺の秘蔵コレクションから持って行きや

がつてえええええ！」

「ハツハツハ！使わねえ方が悪い！では、とんずらさせて貰うぜ？あb……」

「悪いな。俺もテメエを逃すわけにはいかないんだわ」

ジャックがお得意の気配遮断で本部から逃げようとした瞬間、唐突に前方から聞こえてくる声にジャックは前方を向く。

曲がり角が無い廊下の少し離れた所にそいつはいた。

ジャックはそいつが来る予定は知らなかった上に自分の気配感知にそいつが引っかけられなかったことが疑問で前方にいるそいつを見て驚きの声を上げる。

「アザゼルウ!?何でお前がいるんだ!？」

「項羽から聞いたぞ。俺と項羽の力作を勝手に使ったらしいな?てめえには仕置きの必要だ」

「ちよ、ま!グフツ！」

ジャックはアザゼルの攻撃から避けられず顔面に喰らったために動きを止めてしまい、その隙に項羽から捕まってしまった。

それからジャックがどうなったか……語るまでも無いだろう。



「あー、酷い目に遭った……………」

おひさー、ジャックだぜ。

あの駒王町についての報告は既に終わり、今日は学校が休日な上に、最近は特にこれと言った用事もないので、暇を持って余していた。

そんな俺は今、本部の廊下をとぼとぼ歩いてた。
つたく、なんだよあいつら。

あいつらの作った人口神器なんて使う機会なんかそんなないんだから、別に良いじゃ無いか。

だったら大切な人に使った方が良いじゃんかー。

……………なのに、項羽とアザゼルと来たら、罰として俺を被検体にしやがって……………。
ちよつとだけメタくなるが、文面だけじゃ今の俺の状態がおかしいのは伝わらないだろうから教えるが……………。今、俺の声は普段よりも高くなってる。

察した奴はいるかもしれないが、俺は今、女となってる。

あいつらの被検体となつて最後の最後に“性転換銃”とかいう摩訶不思議なものを作つてたらしく、それを浴びせられたら、俺の髪が腰辺りまで伸び、身長が少し縮んで、下がなくなつて上が生えた……………。地味にでかいし……………。

たぶん、エルよりあるんじゃないか、これ。

エルに嫉妬されないだろうか……………。されるな、うん。

まあ、そんなエルも可愛いんだけどな（↑嫁バカ）

そうやって、新しく増えた双丘を見てると、突然後ろから誰かに抱き着かれた。

俺は振り返り、その人物を見る。

そこにいたのは黒いマントで身を包みながらも、その中から細い腕を俺に巻き付けて、顔にいくつかの傷跡がある白髪の少女が俺の顔を見つめていた。

その少女は俺がそちらへ向くと、満面の笑みを返して言う。

「おかあさん♪」

「だから、お父さんと言いなさい」

俺のことをおかーさんと呼ぶこの少女の名は、*“ジャック・ザ・リップ”*。

俺と同じ名前だ。

しかし、顔は今の俺の顔を幼くしたただけなので、殆ど変わらないのだが、俺とエルの実の子ではない。

まだできてないからな。

けれど、養子だから俺とエルの子供なのは間違いないだろう。

そんなこの子の正体は、*“サーヴァント”*だ。

サーヴァントというのは、*“聖杯”*というあらゆる願いを叶えることができる願望 \boxtimes を手に入れるための儀式で召喚される使い魔のような存在だ。

その儀式というのが、“聖杯戦争”。

七機のサーヴァントと7人のマスターによるバトルロワイヤル形式で行われる戦争だ。

しかし、それは本来ならの話になる。

俺が参加した聖杯戦争は、十四機のサーヴァントと十四人のマスターによるチーム戦だ。

二チームに分かれ、お互いにいるサーヴァントは7機ずつで殺し合い、勝ったチームでその中の残ったペア同士で更に殺し合い、生き残った一組のペアが願いを叶えられるというルールだったのだが………今回の場合は少し違った。

まず、俺のいたチームが黒で、相手が赤だったのだが、黒はとある一族だけのメンバーだった。

それがユグドミレニア一族だった。

その中、俺は偶々ロンドンにいたのだが、金髪のチャラ男が緑髪の美人を連れていたのを見掛けてたのだが、どうも雰囲気が悪くなく、直感でも嫌な感じがしたので、気配を消してこっそり後を付けてたら、一件の民家の中に入って行って、元から描かれてあった魔法陣が光り、チャラ男が呪文を唱えた終わった瞬間、その魔法陣から出て来たのが、ジャックだった。

ジャックは出て来た瞬間にそのマスターを殺した。
何故かって？

あのチャラ男は「ジャック・ザ・リッパー」を呼び出して、緑髪の美女を生贄に差し出そうとしていたからである。

ジャックはそんな事をする奴が許せなかったらしく、緑髪の美女——
六導^{りくどう} 玲霞^{れいか}をマスターとして認めた。

俺は当時、聖杯戦争の事など全く知らなかったので、危険と判断して彼女たちと接触し、それから紆余曲折といった運命を退け、とある事情により、ジャックは受肉して俺たちの養子となっている。

「あれ？……………おかあさんになってる…？」

「あ、今気付いたのか。いや、違う、そうじゃなくて……………。とりあえず、俺のことはおとーさんって呼ぶんだぞ？」

「……………？おかあさんはおかあさんだよね？」

「うう……………」

ジャックはマスターとなった者を老若男女関係なくおかあさんと呼ぶ。

俺は男だから勘弁してほしいのだが……………そんなつぶらな瞳で俺を見るな…………。

俺に大ダメージが来るから……！

「あれ？玲霞だ。何やってるの？……………ジャック？」

そんな中、エルまで現れた。

混沌待ったなしじゃねえか！

取り敢えず、俺はエルに説明する。

「よう、エル。実はな——」

く説明中く

「項羽……………（　　）（　　）（　　）」

「だろ？（o^J^）b」

裏切り者おおおおお！

つか、項羽てめえ！

なんでお前がいるんだよ！

「いや、部屋に忘れ物したから取りに来たんだが、面白そうなことになってるなと思

い、駆け付けてきたぜ！」

親指立てんなこの野郎！

お前のせいで俺がこんな目に……………

「だが、エルは嬉しそうだぞ？」

「（満面の笑み）」

「ならばよし」

「おかあさんが二人いるー！わーい！」

もはやカオスであったが、嫁が喜んでいるのならば構わない!!

それからとやかく騒ぎ、項羽が神器の研究に戻ってから三人だけとなった。

エルが俺に嬉しそうに話し掛けてくる。

「ふふつ、君が女の子だったたらこんなにか愛いんだね」

「はあく……。後一週間このままか……。辛い……」

「おかあさんは可愛いよ？」

「エル、玲霞……。俺のメンタルは豆腐並みなんだ。……今時性転換ものなんか

流行らないぞ……」

「別に良いじゃんか。今夜は楽しめそうだね♪」

「エル……。お前、まさか……！」

「今夜は寝かせないよ？」

「ジーザス!!慈悲をくれ！」

「あるわけないじゃないか」

「(チーン……)」

「おかあさんが真っ白になっちゃった？」

「大丈夫だよ玲霞。明後日には元に戻ってるから」

「何をするの？（好奇心&無邪気な目）」

「……………玲霞にはまだ早いよ。あー、そうだ。今日は誰かと遊ぶんじゃないかっただの？」

「あ！そうだった！ナーサリーと遊ぶ約束してたんだった。またねー」

「うん、またね」

締めくくりにお互いに手を振り合い、残ったのはエルキドゥとジャックだけになった。

ジャックは彼女の姿が見えなくなった途端、立ち直りエルキドゥに向く。

「それで？何か用か？」

「酷いな…………。これでも僕たち夫婦じゃないか。なのに、真つ先に掛ける言葉がそれだなんて…………」

「それは悪いと思ってるが、この時間帯はお前いつも保護した奴らの面倒を見てるはずだろ？だからこんな廊下で会うことなんて滅多にないと思ってるな」

「そうだね。じゃあ、早速始めていこうかー！」

「おー」

「まず一つ目」

「複数あんのかよ……」

「ゼルレッチさんが今度来るってさ」

「あ？………あああ！？嘘だろ！！なんで？！」

ゼルレッチ………本名をキシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグと言い、真祖という吸血鬼の完全上位互換的存在の一人で、魔術協会のトップに君臨する人物だ。

魔術協会は「魔法使い」達が集う組織——『黄金の夜明け団』や『灰色の魔術師』——とは別の「裏側」の存在で、恐らく唯一と言つて良い、神秘——「裏側」の存在——の漏洩を防止するのを目的として設立させられた魔術師達だけの組織だ。ゼルレッチさんも表は魔術師を装つてるが、実際は人外だしな。

そして、超強い。

前に勝負することになったんだけど、手も足も出せずフルボッコにされたよ畜生め。しかし、なんで来るんだ？

あの人の裏の仕事の邪魔はしてないはずだが……？

「『今度話があるから邪魔させて貰うぞ。アップルパイ用意して待つておれ』だそうだよ」

「話つて何だよ………。平行世界で何かあったか……？またドラゴンか……？」

「二つ目」

「進行早いな!? もっと説明ないの?」

「歓迎会は三日後だって」

歓迎会。

新たに保護した者や入団した者達を纏めて歓迎するために行われるパーティーだ。ある程度の数が揃ったら開催しており、その日だけは仕事は早めに切り上げて皆が自由参加できるものだ。

今回で一定数に揃ったらしく、その準備をしてたらしい。

あー、片付けが大変な予感がする…。

「もうか。早いもんだな」

「三つ目」

「……………なあ、俺の言葉に返さないお前もどうなの?」

「バルパーの次の出現予定地が分かったよ」

「!!……………やっとか」

「うん、やっただよ」

バルパー・ガリレイ、自らの悲願のためだけに数多の子供の命を犠牲にした大罪人。聖剣の妄想に取り憑かれた哀れな愚者だ。

あいつは実験を終えては被検体だった子供達を処分して捨ててった。

生き残りはいないものかと探していたところ、なんとグレモリー眷属の『騎士』である木場祐斗が唯一の生き残りだった。

本名をイザイヤと言い、今は偽名で一般生活と悪魔稼業をこなしているが、その裏では復讐心を日に日に募らせている。

今となつては恐らく、聖剣を見ただけで仮面が崩れるはずだ。

……………本来なら、俺は彼を救えたはずなのだ。

しかし、未熟だったために気付くのが遅れ、陰ながら見守つてきたが……………もう良いだろう。

「俺が行こう」

「おや？会議はやらなくて良いのかい？」

「いけない。彼は俺が殺したも同然だ。今までは陰ながらだったが……………今回のタガが外れるかもしれない。これは俺の我が儘だが、行かせてくれないか？」

「フツツ、分かっているとも。行くと良いさ。ただし、僕も行くよ」

「そうかい。んじやあ早速ー……」

「俺を忘れては困ります」

俺とエルの会話に突然割り込んだきた男の声。

それは横から聞こえたので、そちらを向くと……………ゲオルグが立っていた。

「ゲオルグ………なんでここに？」

「聖劍計画を潰すのでしよう？なら、連れてつて貰えないかと」

「それは良いが………なんか目的でもあるのか？」

「あると言えばあります。紛い物のエクスカリバーを研究材料にしたい」

「あー、そう言えば天使や墮天使にも効く「闇」を開発してたんだけ？」

「ええ。今回で完成するかもしれません。………今更ですが………その姿はいい……？」

「項羽のせいだ。後は察せ」

「あつ、はい。後一つだけいいですか？」

「ん？なんだ？」

「出てこい」

「……………」

「あれれ？なんでレオナルドがいるの？」

ゲオルグの後ろからこそつと現れた小学生ぐらいの少年、名をレオナルドと言い、
ロンギヌス神滅具の中でも四種しかない上位の存在である魔アナイアレイション・メーカー獣創造の所持者だ。

先日エルが保護してきた者達の一人で、まだ本部に慣れていないだろうに………な
 んでこんな所に？

「実は……………レオナルドが自分の力をいち早くも制御したいと言って俺の所に来まして……………まず最初に実戦を見せてから覚悟を決めて貰った方が良いと思ひまして。それならば、最近あのクソ爺が動くらしいから、それに同伴させてもらえないかと。それに、俺の神滅具があつた方が保険にはなるでしょう？」

と、ゲオルグは笑みを浮かべながら理由を淡々と述べる。

そりゃ、確かに神器の中でも最高峰の防御力と厄介さを兼ね備えてる絶デイメンション・ロスト霧ならばレオナルドも安全に見学できるし、帰りも楽だが……………

「お前……………他の奴らから文句とか言われないのか？」

「情報収集を制する者が世界を制するのです。敗者が吠えたところで何も思ひません」

「流石だねえ……………」

俺らの幹部は十二人いるが、殆どの幹部ともなると中々外に出れるチャンスが中々無いため、今回で二回連続で俺の護衛という建前を使って外出するゲオルグに何かと言われる。

先日行ったアスクレピオスやギヤスパーも二、三ヶ月ぶりだったしな。

それをどうでも良いと言えるのはベルセウスと曹操、カルナぐらいだろう。

曹操は項羽と一緒にいられれば文句なしだし、ベルセウスはよく情報収集のために外

に駆り出される上にはぐれ悪魔を狩りに出掛けることもあるし、カルナは農作業に夢中だからな。

まあ、今回はゲオルグが一枚上手だったということでも納得させるしか無いだろう。

そもそもゲオルグを口で負かすことができるのは俺らボスと曹操とカルナぐらいだろう。

黒歌と美猴は面白いぐらい簡単に言いくるめられるし、アスクレピオスや孔明は粘りが結論で言えば話題を逸らされ帰ってくしな。

いや……………ゲオルグは分かるとしてレオナルドは……………そうか。

そもそもゲオルグは賢い。

そんなゲオルグがこんなときにレオナルドを連れて行こうとはしないだろう。

なら、彼の覚悟も本物のはずだ。

フツ、ゲオルグは本当に子供に甘いな。

俺はレオナルドの目線に合わせるようしやがみ込み、聞く。

「……………まあ、そうだな。トップである俺が認めよう。覚悟は当然……………？」

「……………(こくり)」

「OK、ならば連れて行こう。エルも良いよな?」

「勿論」

「じゃあゲオルグ頼む」

「分かりました」

そうしてゲオルグは転移の魔法陣を展開させる。

待つてろよ、ガルパー。

今回はあの時のようにはいかねえからな？

そうして、俺たちの見てる景色が変わっていった。